

FIELD NOTE

no. 75 Dec.

都留文科大学 地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 75 / 2012 / Dec.



10 周年企画

第3回 『フィールド・ノート』を
つくるということ
～OB・OGとの座談会～

特集

観

コンフリーに近づく

秋の山を歩く
—きのこから知る山のようす—

「観る」を支える人

秋の川探訪記

はるちゃんの都留生きもの図鑑
第2弾 ～森のネズミ アカネズミ～

街の変化を記録する
—長安寺の山門から—



表紙写真：香西恵

夕方、中屋敷フィールドの入り口にて。
自分の影が目の前にありました
(2012 年 10 月 10 日撮影)

ギャラリー写真：平井のぞ実

風に揺れるムラサキエノコログサ。赤
坂駅近くの国道沿いで
(2012 年 11 月 11 日撮影)

裏表紙写真：細矢萌

都留市駅の周辺にて。鳥がちょうど
中央に来てくれました
(2012 年 11 月 4 日撮影)

FIELD・NOTE

no.75 Dec.

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ゾフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

CONTENTS

特集

06.

観



- 08. コンフリーに近づく
- 10. 秋の山を歩く
—きのこから知る山のように—
- 12. 「観る」を支える人
- 14. 秋の川探訪記
- 16. はるちゃんの都留生きもの図鑑 第2弾
～森のネズミ アカネズミ～
- 18. 街の変化を記録する
—長安寺の山門から—
- 20. 「観る」をみつめて

21. フィールド暦

22. ひろいもの 最終回

24. 水の流れ

26. 都留市の旧5町村を巡る(3) 旧禾生村
舟場橋にまつわる人・地域のあゆみ

28. 鳥居の形
—八面神社の鳥居から—

30. 鈴木商店を訪ねて

32. 幸せのおすそわけ
—よねやま手芸店—

34. 紙漉き
～「一枚」を繊維から～



36. 山梨の味 ～ワイン編～

38. フィールド・ミュージアムのたのしみ 第19回
谷の町・史の里 谷村にあった映画館のこと ②
「ヒロバ」での遊び —その後の「谷映」(1)—

40. 起き上がる朝
—暮らしのなかの詩—

42. 10周年企画 第3回
『フィールド・ノート』をつくるということ
～OB・OGとの座談会～

45. Field・Note News

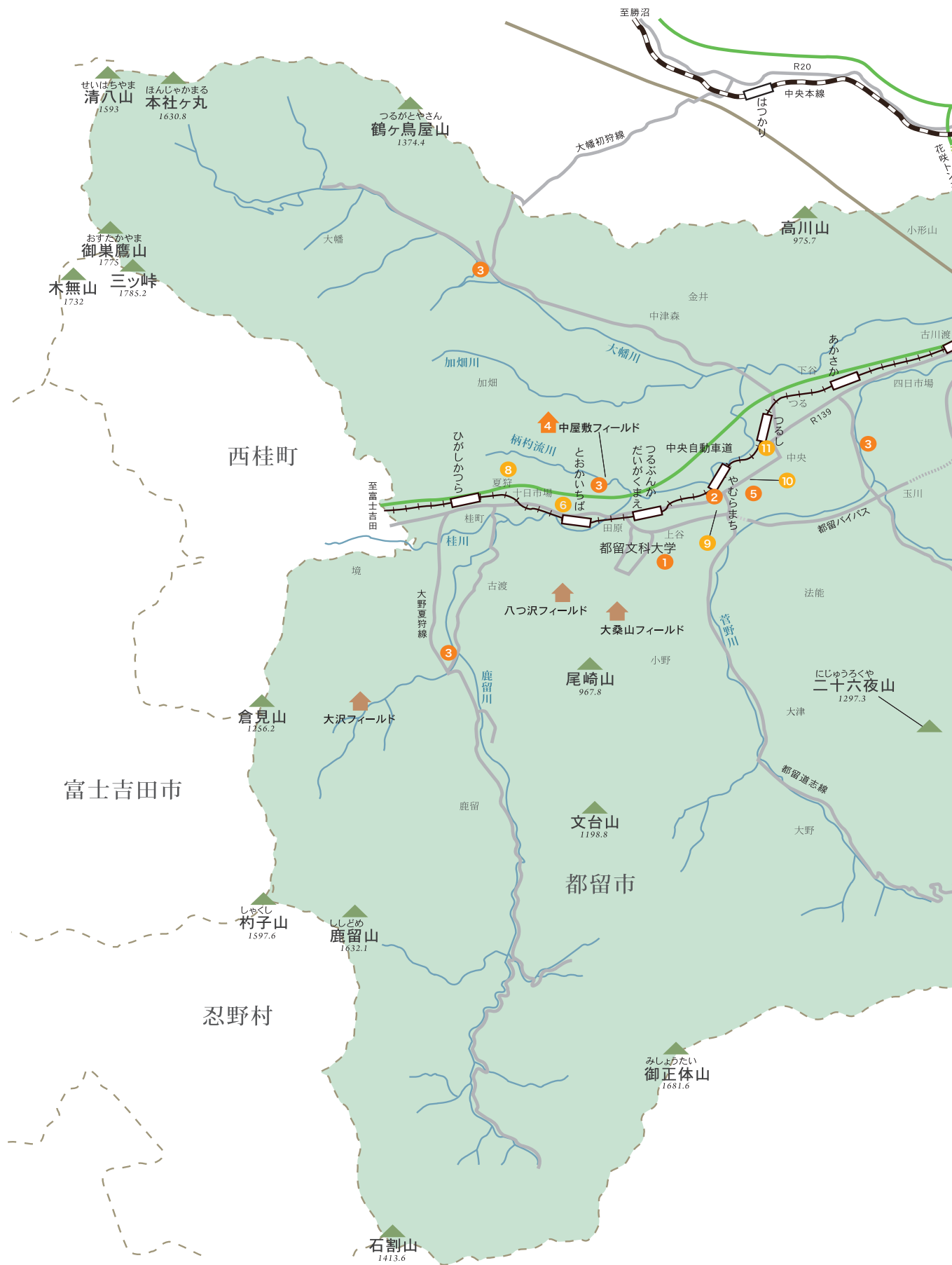
46. 編集後記

FIELD MAP

2012.12



- 1 P.10-11 秋の山を歩く ―きのこから知る山のように―
「楽山公園～都留自然遊歩道」
- 2 P.12-13 「観る」を支える人
「ミュージアム都留」
- 3 P.14-15 「秋の川探訪記」
「大幡川」「柄杓流川」
「菅野川」「鹿留川」
- 4 P.16-17 はるちゃんの都留生きもの図鑑
第2弾 ～森のネズミ アカネズミ～
「中屋敷フィールド」
- 5 P.18-19 街の変化を記録する
―長安寺の山門から―
「長安寺」
- 6 P.24-25 水の流れ
「永寿院」
- 7 P.26-27 都留市の旧5町村を巡る(3)旧禾生村
舟場橋にまつわる人・地域のあゆみ
「舟場橋」
- 8 P.28-29 鳥居の形 ―八面神社の鳥居から―
「八面神社」
- 9 P.30-31 鈴木商店を訪ねて
「鈴木商店」
- 10 P.32-33 幸せのおすそわけ ―よねやま手芸店―
「よねやま手芸店」
- 11 P.38-39 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第19回
谷の町・史の里 谷村にあった映画館のこと②
「谷村映画劇場跡」



特集

観

何かを見ることはとても日常的なことで、特別な行為ではありません。

けれど「観る」ことは、

ただ目を使って見ることだけではない気がしました。観る行為には、どんな意味があるのでしょうか。

今回は「観る」という行為そのものをみつめなおしてみました。





コンフリー に 近づく

別符沙都樹（国文学科1年）＝文・写真

私の家では昔からコンフリーという植物を育てていて、その葉を天ぷらにして食べてきた。しかし何の気なしにコンフリーについて調べてみたところ、微量ながら葉や根に毒があるため厚生労働省で食べるのを控えるように呼びかけていた植物だと知る。慣れ親しんできていると思っていた植物なだけに、衝撃を受けた。知らないことがまだまだありそうな気がして、コンフリーを見つめなおしてみた。

思わぬ再会

都留に来て初めてコンフリーを目にしたのは今年の夏だった。アパートの庭の一角に植えられているキウイの棚の下で、二株のコンフリーがその濃緑の葉をのびのびと伸ばしていた。

大家さんになぜ育てているのか尋ねてみたところ、育てているどころか勝手に生えてきているので雑草だと思っていたという。アパートのコンフリーは、私の知る限り夏場だけでも最低2回はほかの雑草とともに刈りとられていた。しかし10月の末にはそんなことはなかったかのように、柄^えから葉先まで50cmはあろうかという葉を何枚も生やしている。近づいて見てみると、一株の高さはゆうに膝丈はあった。よほど強い植物なのだろうとその生命力に驚く。

茎にも葉にも白みがかった透明の荒い毛がびっしりと生えている。特徴的な匂いがあるわけではない。葉は大きくなるにつれて厚みが出てきて、毛は触るとちりつとした痛みを感じるほど。天ぷらにすれば痛くも何ともなかったのが不思議だ。毛は葉先



に向かって生えているようで、逆撫でないようにゆつくりと慎重に撫で上げてみると、ざらつきはするものの痛みはない。

自分へ浸透するもの

何度か葉を撫でているうちに、小学校低学年のころ実家の畑の隅に生えているコンフリーを採りに行ったことを思い出した。「このぐらいの大きさね」と母や祖母に言われた大ききの葉を選んで摘みとっていく。天ぷらにするのは生えたての比較的柔らかい葉だ。それでもこのぐらいと言われた大

コンフリー
(別名 ヒレハリソウ)

- ・ムラサキ科
- ・地中海沿岸～西シベリア原産の多年草
- ・5～7月につりがね状の花がさく



上：葉の表面。近くで見ると無数の毛が生えていることがわかる



右：写真下がコンフリー。夏場には雑草に埋もれるようにして生えていた (2012.11.7)

きさは、幼い自分の掌よりずっと大きい。そういえば摘みとった葉は、気を抜いて少しでも強く握りしめるとちくちくと刺さった。ずっと食べ続けてはきたものの、すっかり忘れていた幼いころの記憶。触覚の記憶だ。感触が記憶を呼び覚ますなんてことがあるのだ。呼び覚まされた記憶は新しい発見のように自分のなかに浸透して吸収される気がする。

なかでも大きな葉の裏を覗き込んでみると、一匹の青虫が葉の陰に隠れるようにひっそりと丸まっている。大きい葉ほど小ささまざまな穴がいくつも開いているが、その穴を開けたのはこの青虫なのだろうか。葉に穴が開いているのは当たり前のことだと思っていたが、穴が開くにはとうぜん開けたものがあるはずだ。でも私はその青虫を見るまでそんなことを考えたこともなかったのだと気づく。当たり前だと思っただけからこそ見落としていたり、考えていなかったりすることがあるのだ。

今では出かけるとき、それがまるで友人かなにかであるかのようにようすをうかが

う。夏場まで存在にすら気づかなかったのに、アパートを出るとまず最初に目が行くものになった。天気がいい日にはコンフリーの表面の毛が光を反射してより白みを帯び、きらきらと輝いていて美しい。ただ横を歩いて通り過ぎていたころには気づかなかったこと。コンフリーに近づいたから分かるようになったことだ。時間があるときには、たびたびコンフリーの葉を摘まんでみるようになった。寒くなるにつれて葉が着々と厚みを増し、固くなっていく。夏場だけに食べ物としてのみ認識するのではなく、この肌寒い時期に見たから分かった。

今までただの食べ物として見ていたコンフリーとの距離がぐっと近づいた気がした。その対象が私に何かの働きかけをしてきたわけではない。それでもこうやって一つひとつのものに集中して、私が知ろうとする新たな物事が見えてくる。今回はアパートの庭の一角のことだ。ぐるりとアパートの庭を見渡すだけでも名前も知らない植物がたくさんある。植物だけではなく、新たな発見は周りにいくらでもあるのだと思うと楽しみで仕方がない。



ツルタケダマシの成長過程

秋の山を歩く

—きのこから知る山のようす—

きのこを見つけない、そう思ったのは、小
学生のころに見つけたきのこのことを思い
出したからだ。かさの部分を人差し指
と親指でつまんで押してみると、ぽふつと
胞子を噴き出すのがおもしろくて、学校に
持って行ったのを覚えている。あのきのこ
は何というきのこだったのだろう。ほかに
はどんなきのこが生えているのだろう。き
のこを探して本学美術棟の裏にある楽山公
園を歩いてみた。

きのこを探して

きのこは、簡単に見つかるものではない、
と思ひ込んでいた。どうしてそう思ひ込んで
いたのか不思議なもので、じつさいに山を歩
いてみると、あちらこちらにきのこが生えて
いる。アジサイの根元に、枯葉の隙間に、切
り株に。生える場所も、その姿カタチもじつ
にさまざま。すつと伸びた柄えの上にゆるやか
な曲線を描いたかさが開いている、というき
のこのイメージとはかけ離れたものもある。
まるで触手のような、鮮やかな赤色をしたベ
ニナギナタタケ。目立つ色をしているのに、
私はしばらく気がつくことができず、一緒に
歩いていた砂田真宏君すなだまひろに教えてもらった。同

じところを見ていると覗いているものは違ふこ
とを実感する。

小学生のころに見つけた、あのきのこも見
つけることができた。かさの部分が丸く、そ
の中心には胞子を噴き出す穴が開いたホコリ
タケ。穴が開いているものは老菌で、幼菌は
穴が開いていないということを図鑑で知っ
た。今まで名前も知らずにいたけれど、知っ
ているのと知らないのでは何かが違う。ば
んやりとしていたものが鮮明になるような、
景色のなかの一部でしかなかったものがその
存在を主張しだすように見えてくる。見つけ
たからには、やつぱりかさの部分を人差し指
と親指でつまんで押してみる。ぽふつと黄色
い胞子が噴き出て、私を懐かしさと新鮮さの
入り混じる気持ちにさせた。

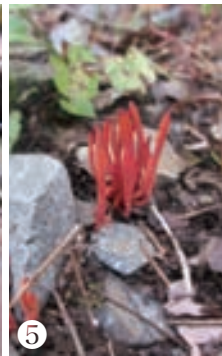
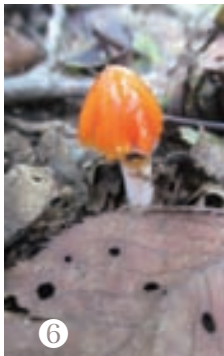
きのこの成長

綺麗な円錐型のかさに、それを支える太い
柄。ツルタケダマシというきのこを見つけた
のは10月13日のきのこ探索でのこと。これま
でに見つけたきのことは比べものにならない
い、その大きさと立派な姿に胸が躍った。20
cmくらいはあるだろうか。かまぼこのような

さわり心地で、かさの表面はつるつるとして
いる。図鑑によるとこのツルタケダマシは毒
きのこで、食べるつもりはなくても、毒があ
ると知ったときはどきつとした。その周囲に
は、かさがボロボロになったタマゴタケが生
えている。これは動物が食べたのかもしれない。
ほかに、まるでニワトリの卵のようなツ
ルタケダマシの幼菌がふたつ。この卵のよう
な幼菌が、円錐型のかさを開いたきのこの姿
になるようだ。そのようすを見てみたい。す
ぐさま、砂田君と一緒に定点カメラとセン
サーカメラを取りつけて、タマゴタケを食
べにくる動物と、ツルタケダマシの成長の
ようすを観察することにした。

2日後回収したセンサーカメラには、動物
の姿が写っていた。タヌキくらいの大きさの
動物（暗闇に光る目しか写っていないので判
断できない）とシカだ。しかし、どちらもき
のこを食べているようすはなかった。それで
も、先日自分が立っていた場所に動物たちが
来ているのだとわかったことで、野生の動物
たちが私たちのすぐそばで生活しているとい
う実感が湧く。

定点カメラは、30分単位でタイマーをセッ



1. ホコリタケの幼菌。未熟なものは全体的に白っぽい／2. ホコリタケの老菌。成熟すると灰褐色になる／3. おそらくエノキタケ。野生のエノキタケは市販されている白く細いものとは違う。ナメコにそっくりで判断がつかない／4. ブドウタケ。切り株に生えていた／5. ペニナギナタタケ。縦に割くと、なかは薄い赤色をしている／6. アカヤマタケ。かさには粘性がある。かわいらしいきのこ

トしてツルタケダマシの成長のようすを写真に収めた。卵のような幼菌がぐいぐいと上に向かって伸び、じわじわとかさが大きく広がっていくさまはとても見事なものだった。あつという間に姿を変えて、跡形もなく消えてしまうきのこの成長過程を見ることがなかなかない。自分で見つけたうえに、これを見ることが出来た私は幸運だ。

山のように

楽山公園を歩いてみると、きのこのほかに気がつくことがあった。静かな山のなかで聞こえる音は鳥の声であつたり、木の葉が落ちる音であつたりする。はじめのうちはきのこを探することに夢中で足元ばかり見ていた私も、山に入る回数を重ねるうちに山のように空気をかける余裕が出てきた。

モグラが地中を進んだ跡を見つけることもあった。いつも同じように見える山の景色には違いがある。緑色ばかりだった木の葉のなかに赤や黄色が混ざり、道には落ち葉が増えていく。倒木や枯れ木などの、途絶えてしまった命を糧にして育つきのこたち。静かに、ゆつくりと山のようにすは変わっていく。それは、

何度も足を運んでこそ見えてくるものなのだろう。

見つけたきのこの名前やその特徴を知ることとは容易なことではなかった。同じ種類のきのこでも幼菌と老菌では姿カタチがまるで違うものもあるし、とてもよく似たきのこもある。自分で撮った写真と図鑑では角度や場所の雰囲気によっても違って見えてくる。きのこを見極めるなら、きのこの成長過程における一つひとつの姿を知らないとだめなのかもしれない。

きのこを探して観察してみること。写真を撮影して図鑑と見比べてみる。そして知った、小さなきのこから見えてきた山のようす。見ているようで見えていないことが私の周りにはたくさんある。自分が意識してはじめて、見るから観るへと、ものを見つめる自分の姿勢が変わっていくのかもしれない。

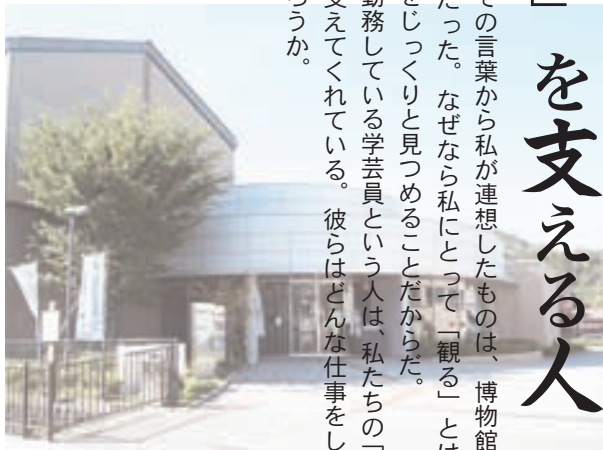
名前のわからなかったきのこたち。名前がわからないのは残念だが、かさのかたち、生えかたが本当にさまざまでももしろい

藤森美紀（社会学科4年）Ⅱ文・写真



「観る」を支える人

「観る」。その言葉から私が連想したものは、博物館という施設だった。なぜなら私にとって「観る」とは、ものごとをじっくりと見つめることだからだ。博物館に勤務している学芸員という人は、私たちの「観る」場を支えてくれている。彼らはどんな仕事をしているのだろうか。



ミュージアム都留の外観

富

土急行線都留市駅方面から大学へと向かうとき、谷村にあるミュージアム都留の前を自転車ですく通りすぎる。そのたび、ここに勤める学芸員のかたがどういった仕事をしているのか、と気になっていた。

10月23日の午後、私はミュージアム都留をたずねた。入った先は落ち着いた雰囲気、の漂うエントランスになっている。左手には木でできたカウンターの受付があった。

受付で用件を伝えると、しばらくして森屋

まさゆき
雅幸さんが笑顔でいらっしゃった。森屋さん

は都留市教育委員会で学びのまちづくり課、文化振興担当の主任を務めており、学芸員の仕事も兼任している。ミュージアム都留には7年前から勤務しているとのこと。勤務中でお忙しいにもかかわらず、森屋さんは私の質問に丁寧に答えてくださった。

仕事内容に迫る

学芸員のおもな仕事は資料の研究や調査などだが、それ以外にも展示や開催する行事の企画といった仕事も多くあるとのこと。

そのなかでまず最初にお聞きしたのは、資料の扱い方について。一言で資料と言っても、その種類は幅広い。それぞれに厳しいルールが決められているようだ。たとえば収蔵庫の温度や湿度管理の徹底。ほかに金属に触れるさいに白手袋を着用することなど、さまざまな決まりがある。森屋さんは苦笑いをして「挙げだしたらきりがありませんよ」とおっしゃった。

展示の資料は都留市に縁のあるものを選んでいるのだそう。コンセプトは『身近なもので地域を知ってもらいたい』であり、身の周

りのものを題材にすることで、市民のかたに都留市へ目を向けてもらうためとのことだ。

やりがいを感じるのには、来場したかたから反応が返ってきたときや、自分たちの活動の輪が広がっているときだという。森屋さんが挙げてくれたのは、平成22年に開催された『ひな祭り展』だった。この企画は市内のかたに好評で、翌年には地域のかたや「つるし雛」を制作している団体と共同で展示をおこなうことになったという（本誌69号参照）。その後この企画に関わった人たちからさまざまな活動が生まれたのだそう。そのときに森屋さんは、ああ、私たちの展示がきっかけで多くの人々のつながりができ、活動が生まれたのだな、とやりがいを感じたという。私は学芸員がやりがいを感じるのは重大な発見をしたときや、資料と向き合っているときではないかと考えていたのだが、じつさいはそうとも限らないらしい。私が思う以上に、学芸員とは人と関わる仕事のようにだ。

求められる関わり

「学芸員って言うと、資料の研究や管理のスキルが重要なかなって思うでしょう。でも、

地域に密着した博物館ではそれと同じくらい大切なことがあります」

地域に密着した博物館の学芸員に求められるものとは、いったいなんだろう。

森屋さんは続ける。「今年7月から9月にかけて実施した『プレ甲斐絹展』。これが一番いい例ですね。じつは甲斐絹を扱った企画展は、私がミュージアム都留にやってきた7年前ごろから地元のかたや職員のかたとのお話に挙がっていました。けれど市内に機屋さんはあまり残っておらず、博物館でも甲斐絹に関する資料をほとんど所蔵していなかった

ので、資料は簡単に集まるものではないと考えられていたのです」。

ではどうやって実現したのですか、と私がお聞きすると、森屋さんは次のようにお答えしてくださった。「最近になって市民のかたとともに活動する機会が増えていきました。そこで市民のかたに、ご自宅に甲斐絹はありませんか？ 甲斐絹の展示を企画しているのですが、とお尋ねしたら、うちにあるよ、いや、あたしの家には3枚あるよ、と皆さんが快く甲斐絹をご寄贈してくださったり、またお貸ししてくださったりしたので。最終的には展示室内には収まりきらないほど集まりました。地域のかたとこまめにコミュニケーションを図ることで、『プレ甲斐絹展』は実現させることができたと思います。学芸員にとって重要なのは、地域のかたとしっかり関係を築いていくこと。これに尽きます」。

今後市民のかたとともに博物館活動をおこなっていきたい。森屋さんが最後におっしゃったこの言葉は、学芸員の仕事がかたに人に関わることで成り立っているものだということを表しているように感じる。



身振り手振りで展示物の説明をする森屋さん



『プレ甲斐絹展』のポスター

思えば、興味をそえられる展示や行事が開催されるたび、私は博物館へと足を運んできた。あのころはそれほど意識していなかったけれど、私が目にしてきた展示や行事は森屋さんのような学芸員によって支えられていたのだろう。研究をしている人に限らず、市民や企画に興味のある人と協力して、展示や行事をつくりあげていく。それが学芸員という仕事だった。

これまでは博物館で見かけたり、本を読んだりするだけだった学芸員。その仕事の内容は資料や展示品を扱うだけでない。人との関わりという目に見えないことも多いに扱う学芸員のその姿に、私は強く惹かれた。

細矢芽（国文学科1年） 文・写真
ミュージアム都留 写真提供

秋の川探訪記

都留に来て4年目の秋を迎えた。もう都留のあちこちに足を運んだようなつもりでいたが、まだ自分が足を踏み入っていない場所があることに気づく。それは川だ。市内にはいくつもの川があるにも関わらず、川から遠ざかった生活をしていたように思う。生きものとの新しい出会いを求めて、秋の川に出かけてみた。

大澤かおり（社会学科4年）＝文・写真
砂田真宏（初等教育学科4年）＝写真

すげのがわ
菅野川 10月10日

写真の傍流は、きわめて流れが緩やかなため、小さな池と呼んでも差し支えないほど。青々とした水の色が印象深い。胸まで達するほどの深さがあったため、奥まで入っていくことはできなかったが、浅いところにはアブラハヤなどの魚がいたり、動物の糞があったりと生きものの痕跡が見られた



水中を移動するミズカマキリ



おおはたがわ
大幡川 10月22日

ここでは動物の姿は見つけられなかった。ほかの川に比べると、大きくてごつごつした岩が目立ち、岩と岩のあいだを跳ぶように移動するのが楽しい

都留に来てから初めて訪れた菅野川。10月に入ってから、空気が急に冷え込んだようだ。水と冷たさを防ぐための胴長を着用していなければ、川のなかを動き回るのは難しいだろう。勢いよく流れる本流の脇に、傍流がある。その水面をついといと移動する生きものが見えた。ミズカマキリだ。なかなか見られない生きものらしいが、その日はパッと見ただけで5、6匹は確認できた。ところが2週間後、あらためて菅野川を訪れたさいには、ミズカマキリの姿はどこにも見られなかった。生きものとの出会いは約束されたものではない。まさに一期一会なのだ。

鹿留川では網を使って生きものを捕えることを試みる。草が生えて影になっているところを狙って、川の底を網でさらう。泥のなかから、アブラハヤやほこりを身にまとったヤゴが見つかった。まるで宝探しだ。

柄杓流川では、水流にたゆたうバイカモを見つけた。広い川のなかでぼつりと生えている姿は一見、頼りなさげだ。それでも、川底にしっかりと食らいついているのを見ると、応援したいような、ずつと見守っていたいような気持ちになる。

ししどめがわ
鹿留川 10月31日

川幅も河川敷も広さがある大きな川だ。ほかの川に比べ流れが穏やかで、少々深さのあるところでも容易に足を取られることはない。川の端にかぶさるように草が生い茂っているところは、生きものの隠れ家であり絶好の採取ポイントになる



川原から下流を望む



川縁から上流を望む



川底をさらって見つけたアブラハヤ



水に揺れるバイカモ



ひしゃくながしがわ
柄杓流川 11月7日

流れが速く油断をするとすぐ流されてしまいそうだ。川底にはあまり大きな岩はなく、小石や砂がみっしりと敷き詰められているため、歩きやすい

自然に近づくことは「お手軽に」というわけにはいかない。1回訪れただけで、珍しい生きものや決定的な瞬間に立ち会えることなんて、めったにない。じつさい大幡川では、川のなかを覗きこんでも石をひっくり返しても、生きものを見つけれなかった。川へ行けば何かに会えるものと考え、ただ行動していたけれど、それだけでは駄目なのだと反省した。

しかし振り返ってみると、生きものという対象を追うばかりが、自然との関わりかたではないことに気づく。川の広さはどれくらいか、流れの速さや音は、手で触れた水の冷たさは、川原のようす、岩石の大きさ、川に下りるまでの過程……。都留の川を訪れて初めて知ったことは、どんなに小さなことであっても私のなかに積もっている。出会えなかった、という落胆さえも一つの経験だ。

見たいものだけを追って「何もない」と嘆くうちは、そこにあるものは見えてこない。夏と比べて、生きものが影をひそめる秋だからこそ、わかったことだ。そこで味わう景色、匂い、音、温度、感触を、取りこぼさないようにしたい。そうして蓄えてきたものが、また次の新しい出会いを導いてくれると確信している。

はるちゃんの

都留生きもの図鑑

第2弾



都留は生きものたちの
息吹であふれている。
今日は、どんな生きものに
出会えるだろう。

～ 森のネズミ アカネズミ ～



観察装置にやってきたアカネズミ (2012.11.7)

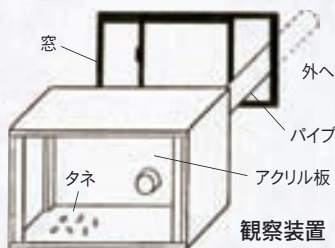
都留市十日市場にある中屋敷フィールドで撮影されたアカネズミの写真 (本誌 73 号 18 頁参照)。それを見た私は、小さいころに読んだ絵本に出てきた野ネズミたちを思い出した。近くにいれば、じっさいに生きている野ネズミを見てみたい。

そこで今回は、中屋敷フィールドにある観察小屋でアカネズミの観察に挑戦した。

鈴木陽花 (初等教育学科 3 年) = 文・写真・イラスト

観察の方法

アカネズミは、広い森のなかを駆け回る夜行性のネズミだそう。偶然に出会うのは大変そうに思えたが、できることなら近くで観察したい。何かいい方法はないかと調べてみると、手作りの箱のなかに誘導し、その姿を観察する方法を見つけた。自然のなかの姿とは言い難いが、これなら近くで観察できるかもしれない。私はさっそく観察装置の製作に取りかかった。



縮まらない距離

10月24日 (水) 19時～21時30分。観察装置を設置して約2時間半、アカネズミがくるのを待ったが現れなかった。カメラを2分ごとに撮影するように設定し、小屋を後にした。相手は生きもの。やはり、初回からすぐに現れるほど簡単ではなかった。

10月25日 (木) 10時10分。観察装置を見る

と、ヒマワリの種の殻だけがきれいに残されていた。カメラを確認すると、午前2時2分と2時6分にアカネズミが写っていた。この観察装置に間違いなくアカネズミがやってきたのだ。フラッシュの強い光が数回たかれたはずなのに、出入りをくり返したようだ。そのようすをじっさいに見られたらと想像するだけで、今後の観察への期待が一気に膨らんでいく。

10月30日 (火) 21時25分～22時30分。約1時間待ったが、今日も現れなかった。今度は、体温に反応してシャッターが切れるセンサーカメラを仕掛けて小屋を後にした。出会いはそう簡単でないと分かっていたけど、帰りの足取りは重い。でも、待てば待つほど出会えた時の感動が大きくなると思えば、こうした時間も決して無駄ではないだろう。

11月1日 (木) 11時30分。観察装置内のヒマワリの種が一粒残らずなくなっていた。蓄えるためにすべて持ち帰ったのかもしれない。種を食べてしまう場合と、持ち帰る場合があるようだ。

11月6日 (火) 21時25分～翌朝6時。いまだ見られないアカネズミへの想いが募り、つ

いに私は小屋に一泊しての観察を試みた。一泊すれば、いつかは見られるだろうという期待から、寒さもあまり気にならなかった。寝袋から顔だけを出して、観察装置をじつと見つめる。朝が迫るにつれ、出会えないのは何が悪いかを考えるようになった。いつもカメラを置いて帰るときは真つ暗だから、暗くした方がいいのではないか。もしかすると、話し声に警戒してこないのかもしれない。そんなことを考えているうちに、とうとう朝がきてしまった。

アカネズミ、あわわる

11月8日(木) 18時30分〜20時35分。今日は静かに小屋に入り、なるべく物音をたてないように準備をすませた。ヒマワリの種のほかに、マテバシイのドングリを三粒用意して置いてみた。明かりも小さな懐中電灯一つだけ。そして息をひそめ、祈るような気持ちでアカネズミを待った。

20時を過ぎたころ、待ちに待った瞬間がやってきた。パイプの出口から、アカネズミがひよっこ顔を出した。写真の印象とは違い、じつさいに見ると小さくてほっそりとし

ていて、動きも俊敏だ。

種を何粒か口に含み、ドングリを一つくわえて持ち去っていった。あつという間の出来事だった。でも、食べ物が残っているのでもた戻ってくるはずだ。予想通りアカネズミはすぐに戻ってきた。さつき拾ったものは、どこかに蓄えてきたのかもしれない。少し明るくしたため、赤茶色でつやつやとした毛のようすを確認することができた。両方の前足を使つて、顔を洗うように上下に動かしている。ていねいに毛繕いをすませると、また種を口に含みはじめた。一度拾った種を置いて、また別の種を拾っている。口のなかの容量が少なくなつたためか、小さな種を選んでいるようだった。なかなか賢いと思った。

口いっぱい種を含むと、アカネズミはまた出て行つた。そのときに、カメラを設置しようとして音をたててしまった。一瞬体をビクッとさせたのに、アカネズミはまた戻ってきた。残りの種を口に含み、さらに器用にドングリを一つくわえて出て行つた。また戻ってくると、最後のドングリをくわえていった。驚いたのは、もう食べ物が無いのに戻ってきたことだ。一つひとつ間違いなく殻である

ことを確認した後、体を伸ばして上の方も確認していた。食べ物への執着と、この徹底ぶりには感心した。それから10分ほど待ったが、アカネズミはもう現れなかった。アカネズミは30分ほどのあいだに、観察装置と小屋の外を5回行き来したことになる。

今までの経験から、ネズミは目が合うとびっくりして一目散に逃げていくものだと思うっていた。でも、かなり近くで観察していたし、途中で物音もたてたのに、一度もアカネズミと目が合うことはなかった。食べ物だけしか見ていないような印象がとても新鮮であり、驚きだった。

* * *

今回アカネズミを待った時間は延べ14時間。じつさいに観察できた時間は30分ほどであつた。得られたものは、生きものに近づけた感動だけではない。そのわずかな出会いの時間には、自分の目で見なければ知りえなかった情報があふれていた。そんな観察の奥深さが、「その生きものを見たい」という私の気持ちを支えているのだ。これからも、生きものを自分の目で見る経験を積み重ねていきたい。

これまでに登場した生きもの



カジカガエル



新築中の山門。大工さんたちが軽やかな身のこなしで作業していた（2011. 5. 14）

街の変化を記録する

— 長安寺の山門から —

昨年（2011年）の2月下旬。都留市文化会館に向かう途中、お寺の山門が覆いに囲まれているのを目にした。きっと、修復中なのだろうと思っていたその門は、街の景観が新たに变化していこうとする姿を表していた。記録を残すうえで大切な心構えや、写真を撮る意義について考え直した、長安寺山門のこと。

牛丸景太（国文学科3年）＝文・写真

街

なかを散策していると、ときどき古い民家が解体されている場面に出くわすことがある。そのたびに、写真を撮っておけばよかったと後悔する。家屋が取り壊された後の更地を見ると、街なかにぽっかりと穴が開いたようで、なんだかもの寂しい。長年そこにあつた人の営みや郷土史の断片が、廃材と一緒にどこか遠くへ運ばれてしまふような気がしてならない。

街歩きの実省

長安寺の山門に目を留めたのは、そうした变化していく街並みというものに関心を寄せ始めたころだった。二階建ての家よりも大きな覆い（素屋根）は周囲を圧倒する存在があり、かなり大がかりな修復工事なのだと予想した。しかし、事実は私の予想とは違っていた。

長安寺のお坊さんにお話を聞いたところ、山門は修復しているのではなく、新たに建て直している、とのことだった。昭和34（1959）年の伊勢湾台風を経験した旧山門は一度倒壊した過去があり、老朽化が進んでいたこともあって、再建の運びとなったと



新しい山門。東日本大震災の影響を受け、完工は今年の5月となった（2012. 10. 19）

いう。寺社仏閣の建物といえば、いつまでも修復保存されるものと信じて疑わなかった私は、このとき自分が思い込みをしていたのだと初めて気がつく。街並みは新たに変わろうとしていた。

もしかしたら街を歩いているときも、こうした思い込みのせいで記録を取り損ね、「後悔」している面があるのではないか。そう反省した。建築中の長安寺山門から、私は目の前にあるものを分け隔てなく記録する心構えを問われたような気がした。

変わらないと思っている（願っている）風景でも、後に大きく変化をとげることは十分にありえる。何気ない日常の風景であっても、記録することに後々大きな意義が生まれてくるのだと思う。

■ 聞き取りメモ ■

長安寺山門は、その色から通称「赤門」と呼ばれる。古写真はいずれも『奥隆行写真コレクション』所収

右：屋根は桧皮葺き、あるいは板葺きであったと思われる。門の右手には潜り戸があった。花園さんは子どものころ、階段のところでよく遊んだという

左：屋根はトタン葺きとなり、潜り戸はなくなっている。階段が削られたのは伊勢湾台風の前、昭和 30 年代だった



昭和 62 年 5 月 20 日撮影



昭和 7 年撮影



昔の階段の跡。山門の新築にともない、隣には新しい階段が造られた (2012. 10. 19)

いまを記録する

記録する意義については、すでに古い写真たちが物語っている。今年の10月21日、私は古写真に写された山門について尋ねるため、再度長安寺を訪れた。昭和7（1932）年に撮影された写真と、同62年撮影のものとを見比べてみよう。すると、階段のところが大きく変わっているのが見てとれる。62年撮影の写真では、山門の敷居付近の階段がごっそり削り取られているのだ。聞けば、そこには現在では見られなくなった昔の習慣が関係しているらしい。

「戦後まもなくのころは、まだ土葬だったでしょ。要するにね、大変だったんだよ」

昨年お話を伺ったお坊さん、花園光明さん（77）がそう語る。かつては火葬ではなく土葬が一般的だった。重い棺を担ぐ人たちは、苦勞が多かったという。家を出棺して長安寺横にある墓地へ行くさいは、必ずこの山門を通らねばならない。そこで、棺の担ぎ手の労を少しでも減らすために上の階段を取り除き、平らに整備したというわけだ。その痕跡は山門が新築された現在でも、新しい階段

の両端に残されている。

古い風景写真から得られる情報をもとに聞き取りすることで、現在では姿を消した、習慣という側面が顔を覗かせた。古写真が伝えるかつての光景と、じつさいにその当時を知る地域のかたの話。この二つが合わさるとき、両者は厚みをもった一つの記録として結実していく。私はその可能性に期待を膨らませた。

古写真を撮影したのは、いずれもこの土地に暮らした方々だ。二枚の写真が撮影された経緯は明らかでないけれど、結果的に貴重な資料が伝えられてきた。大火や水害などによって現在では見られない光景も、古写真には多々記録されている。人が、建物が、生活が、そこに存在したことをしっかりと後世へ伝えられるなら、古い民家が取り壊されても、街並みが大きく変わっていても、もの寂しさを感じることはないのかもしれない。

先人がその当時における「いま」を記録したように、私も一人の記録者として街の変化していくようすを追ってみたい。

「観る」をみつめて

特集を通して、私たちは興味や関心のあるさまざまなものをみつめ、
「観る」の意味を探ってきました。

これまで親しんできた生きものをみつめなおし、新たな発見をする。
長い時間をかけて、一瞬の出会いの大切さに触れる。
移り変わる街なみをみつめ、記録する意義を知る。

そうしてつかみ始めた、「観る」の意味。
それは、自分からものごとくに近づいていくということでした。
加工された情報にとらわれず、
自分でものごとを判断し理解していこうとする意志が、そこにはあります。

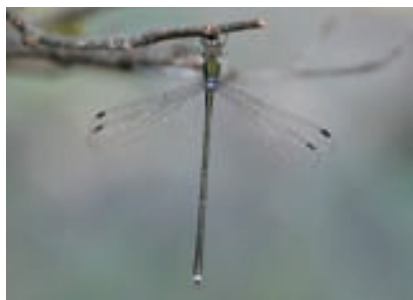
「観る」を通して初めてわかること、「観る」ときに訪れる新しい出会い。
それらを大切にしながら、私たちはこれからも身のまわりを「観」続けていきます。

フィールド暦

2012.10-11

生きものを探して歩いているとき、
はっとする発見があります。
毎年目にするもの、初めて見るもの。
都留市で出会った、
心に残る生きものとの出会いをお届けします。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



イトトンボの仲間
2012年10月22日 都留市十日市場
翅と腹が細いのがイトトンボの仲間の共通点です。草地と、ゆるやかな流れのある水場でよく見えます。



ベニシジミは、早春から晩秋まで草地で見られます



ネットにからまったシロハラ
2012年11月1日 都留市十日市場
防鳥ネットにからまって死んでしまったシロハラです。シロハラは冬鳥として日本に渡来します。



ツルニンジン
2012年10月27日 都留市十日市場
ツルニンジン
ツルニンジンは夏から秋に花を咲かせます。大きな花が特徴で、市内ではあまり見かけない植物です。



クヌギのどんぐりを運ぶカケス
2012年11月1日 都留市十日市場
カケスはクヌギやコナラなどのどんぐりを好んで食べますが、この個体はどんぐりをどこかに埋めるために運んでいる途中です。



キアゲハの幼虫
2012年11月2日 都留市十日市場
かなり遅い時期になってもキアゲハの幼虫が活動していました。この後、蛹になって越冬するのでしょうか？



秋、このような鳥の翼が落ちていることがあります。捕食者に襲われたのだと思いますが、いったい何が起きているのでしょうか？



ツルウメモドキの実
2012年11月13日 都留市十日市場
熟すと赤色の種子が出てきます。採集しても種子の色はあまり変わりません。

ひろいもの

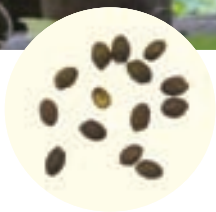
最終回

日々ひろう。

ひろいものがつなぐ縁。

ひろいながら考えたこと。

香西恵（社会学科4年）＝文・写真



ヤマガラとエゴノキ

10月13日、本学附属図書館横ビオトープのエゴノキにて。ヤマガラが一心につついてる／
左：コーヒー豆大のエゴノキのタネ（4月24日）

秋になるとビオトープにヤマガラがやってくる。小径を抜けるとき、コンコンコンコンと、激しく木をつつくような音が聞こえてくる。見ると、葉の陰にあかい胸をしたヤマガラがいる。穴を空けるのでも虫をとるのでもないように、不思議に思っていた。

それが、今秋何度か見かけるうちに、エゴノキのタネと結びついた。タネを木の枝の上において両足ではさみ、そこで殻をつついて割っているのだ。ときどき落してしまうこともある。

エゴノキの実の、白い果肉がはがれて茶色いタネがむきだしになったところへ、ヤマガラが来る。堅い殻のなかの、油脂を含む部分を食べるらしい。とは図鑑で知っていたけれど、これが音の正体だったとは。くちばしと足を使って（全身を使って全力で）、小さなタネから中身を取り出す、彼らの器用さ、一心さに目が離せない。考えてみると、彼らがどのようにしてタネを食べるのか、想像したことなかったのだ。

今年の春先には、同じ木の根元にたくさん茶色いタネが落ちていて、いく

つもひろったことがあった。そのとき、そのなかの割れた殻がヤマガラを食べたあとだと知ったけれど、このときは音を思い出すこともなかった。

一旦分かったつもりでいたことが、後になってほかのものとながつていく。さらに周囲が見えてくる。音を初めて聞いたのは一昨年のことだったから、それから今まで見てきたもの、ひろったものが、ここでひとつにつながったのは、うれしかった。

*

10月2日のこと、大学の職員さんにスズメバチの巣をもらった。昨年、学生ホール横のモミジの木から採ったものだそう。ニスをかけて飾っており、大事にされていたようだった。それを、蜂の巣は悪いものを除けてくれるそうで「いいことがあるように」とくださったのだ。大事に持ち帰って編集室に飾った。

持ってみると、軽い。木の枝に接している部分はわずかで、もうく壊れやすい。うろこのようなものが重ねられているのかと思っていたけれど、表面

巣をもらう

スズメバチの巣（左）とカワラヒワの巣（下）。カワラヒワは高い針葉樹に巣をつくるらしい。ひろったという周囲に針葉樹はないから、どこからか飛ばされてきたのだろうか。大きさ：外径 11 × 10cm、厚さ 6cm、内径 5 × 5cm、産座の深さ 4cm / スズメバチの巣は、枯れ木をけずって練り合わせたパルプを材料につくられているらしい。大きさ：17 × 13 × 13cm



は継ぎ目のようなものではなく、なめらかだ。どうしたらこのような模様ができるのだろう。

10月11日には、知人にカワラヒワの巣をもらった。学内のトチノキの近くに落ちていたという。カワラヒワは、春先のまだ寒い時期に巣をつくるので、巣材に羽毛や綿など、暖かい素材を使うそう。もらったものは枯れ草を編んだお椀形の巣で、たしかに枯れ草のあいだにもこもこした白いものが編み込まれて、暖かそうだった。

ひろいものはそのつくり手や持ち主について知りたくなる。考えてみれば、ひろいもの（おとしもの）を通じてその持ち主に関心を寄せてきた。鹿も木も虫も、鳥もそう。落ち葉や実、角、そして巣。ふだんは遠いそれらの持ち主と、そのおとしものが手元に届くことで出会える。手紙のようなものかもしれない。

いろんな人に素性を教えてもらいながら、届けてもらいながら、受け取ることのできるものが、少しずつ増えてきた。

水の 流れ



永寿院の裏の湧水

湧水を探していたことがきっかけで、都留市十日市場にある永寿院（えいじゅいん）というお寺に出会いました。あちこちから湧き出す水、周りの木々やわらかい土。永寿院を初めて訪れたときに感じたもの……それは流れる水の力。そして周りの自然の流れでした。

水の柔軟性

永寿院の湧水は、富士山に降った雨が地下にしみ込み、ゆっくろろ過されながら、溶岩層を通ってきたといわれています。境内にはたくさん湧水地と小川があるために涼やかでした。入り口から見て正面にお寺があり、その横に湧水の池があつて、奥にある溶岩の崖の間から水が湧き出ています。湧水に近づいてみると、肌で涼しさを感じ、水の音が振動として体に伝わってきます。溶岩をよく見ると、湧水が伝う部分が赤茶色に変色していることに気づきます。さわると粉々になるくらいやわらかくなっていました。

永寿院に行く途中に湧水の小川で、洗剤を使って洗いものをしている人を見かけました。洗剤が湧水の透明な小川に混ざっているのを見て、私は残念に思いました。しかしきれいであることだけが水ではない、と視点を変えてみます。すると流れるなかでさまざまなものを一緒にまぎこんで、海へ流れていく姿もまた水の一面であると思えました。水はきれいな





右上)ワサビが生える湧水地。
丸い葉はわさびの葉です

右下)池に流れる湧水。溶岩を
侵食しています

左) お寺の横にある湧水地。
周りに仏像が3体あるので、そこへ行くと一人
ではないような気持ちに
なります

なものや、きたないもの、生きものにとつ
て有益なものや、害のあるものも選ぶこと
なく一緒にして流れていきます。そして、
流れのなかでさまざまなものと溶けあい、
まきこみ、岩をもやわらかくしてしまう水
をみて、柔軟性を感じました。

流れる水

境内のお墓へ続く細い道に、水汲場とい

う案内があります。そこに流れている水は
地下から汲み上げた水と湧水です。私はた
びたびかよってはそこで水を飲み、ペット
ボトルに水を汲んで家に持って帰ります。
永寿院に湧き出す水はほんのりと甘みがあ
りました。湧水でご飯を炊くと、水道水よ
りご飯の甘みが増すような気がします。ま
た水汲場では、水が流れている場所にワサ
ビが生えています。そこに生えていた植物
がワサビだと知ったのはつい最近で、ある
日たまたまワサビが水に流れていたのを見
て気づき、この何気ない発見に胸が踊りま
した。

湧水はお寺の裏にもあります。この場所
は湧き出す水量が一番多く、小川となつて
別の方面に流れていきます。湧水近くの土
はふだん感じることもないやわらかさでし
た。水が湧き出る場所に行くと、いつも土
が気になります。湧水の場所に行くことで
土、水の味、周りの植物、人の生活などが
目にはいります。水をみつめる自分自身を

通して、水がたくさんの存在とつながりを
持っていることに気づきました。

富士山に降った雨が土の隙間を通り、鉱
物を溶かし込み、永寿院に辿り着く。そこ
でまた岩を溶かして流れてゆく。湧水地の
周りでは、湧水が植物や木々のなかを巡る。
また、水を飲むことで私のからだを循環し
ます。水が流れていくなかで、生活排水や
洗剤、落ち葉など、そこにあるさまざまな
ものを選ぶこと無く一緒に流れていきます。
そうして水は私の知らない場所を流れ続け
ます。

永寿院の湧水を見ることで、水がさまざま
まなものを巡り、とどまることなく流れ、
循環し続ける姿を想像できました。水が植
物や木々、人の命の源となり、生命の流れ
をつくっていることを実感し、水の存在感
が私のなかで大きくなりました。あらゆる
ものを巡り巡ってきた水が、私のなかに流
れていると思うと、なんだか地球上のさま
ざまなものと水を通してつながっているよ
うな気分になるのです。

舟場橋 にまつわる人・地域のあゆみ

1954年4月29日、旧谷村町、^{やむらまち}宝村、^{たからむら}盛里村、^{もりさとむら}禾生村、^{かせいむら}東桂村が合併して、都留市が誕生した。「都留市の旧5町村を巡る」では、各地域を渡り歩き、気になる人やモノから、その地の風土を探っていく。

第3回は、旧禾生村にある田野倉中野と小形山堀之内を結び役目を果たしている舟場橋に注目した。水の流れと人の暮らしの関係に注目し、舟場橋にまつわる記憶を辿っていく。

崎田史浩(社会学科4年)=文・写真



現在の舟場橋の入口(2012.7.29)

(3) 禾生村

1875年、田野倉村・小形山村・古川渡村・川茂村・井倉村・四日市場村が合併し、良田^{きよはら}多く禾本科(*)のよく熟するところから村名となった。

(*) イネ科のこと

川の流れと人の暮らしは連動している。そう意識

しだしたのは、都留市に住むようになってからだ。川の流れは上流から下流へと地域を貫き、その水は農業や工業などの産業を支える役割を担っている。また、町に張り巡らされた水路も、先人が川から水を引くために生み出した知恵である。いっぽう、川の増水や洪水といった水害も、私たちの暮らしと川との強い関係性を物語っている。

そんななか、橋に注目したのは、「舟場橋」の名の由来を知ったからである。かつては、地域と地域を結ぶために舟を渡していた場所であったことから舟場橋と名付けられたのだという。川には橋があつて当たり前との思いがある。しかし、この話を知ったときにはじめて、橋がない時代には川は地域を分断する境目でもあったのだという

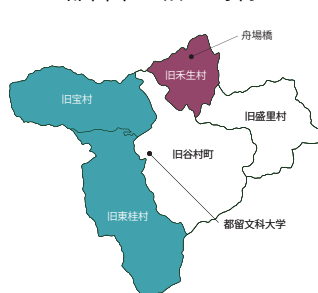
考えを持つようになった。

舟、そして橋。異なる地域をつなぐその要は、どのような歴史を持つっているのか。また、舟や橋が、分断されていた世界に一本の「道」を生み出したとき、それら一帯の地域社会はどのように変容したのだろうか。そんな疑問がふつふつ湧き出たことが、私を舟場橋へと惹きつけるきっかけとなった。

舟場橋の歴史

「田野倉の舟場橋のことを知りたいのですが」「それなら、尾県郷土資料館の館長さんが一番詳しいよ」。いつもお世話になっている都留市郷土研究会の内藤恭義さん(81)に伺ったところ、都留市田野倉にある尾県郷土資料館の館長を務めている山本恒男さん(76)を紹介していただいた(山本さんについて詳しくは本誌58号をご覧ください)。

都留市の旧5町村



尾県郷土資料館には、舟場橋の古い写真が3枚展示されている。一枚は、明治20(1887)年にはじめて架けられた吊り橋のような姿の写真。見るからに危なっかしいようすがうかがえる。もう一枚は大正15(1926)年に撮られたもので、架け替えられたあとの写真。最初に架けられたものより、幾分頑丈そうに見えるが、やはり心許ない。最後は、橋がさらに新しく架けなおされた昭和35(1960)年の写真で、現在の舟場橋でもある。残っている記録は少ないが、たった3枚の写真からも、舟場橋の歴史を



明治 20 年の舟場橋（尾県郷土資料館所蔵）

追っていける。

「戦時中は、地域の人がみんな協力的で、赤紙が届いて出兵する兵隊をみんなで駅まで見送るんだけど、舟場橋を渡るときは、ワイヤーがビシッ、ビシッとなって、大人の人が怖がつていたのは覚えてる。子どもなんかは何もわからないか

ら、キャッキャッいつていたけどね」と、山本さん。そのころの橋は、車が通ることを禁止されていたようで、橋を渡るのはもっぱら徒歩のみ。そのためか、家を建てたときには、地域の人が山で伐った木を運ぶのを手伝ってくれたという話も思い出深く語ってくれました。

舟場橋からみる地域の変化

今の橋ができるまでは、自給自足が生活の基本だった。ただ、物流が増え、日用品などを家まで運んでもらうような暮らしぶりになるにつれ、舟場橋は車の出入りが多くなった。

山本さんが、「川を挟んで生活圏が異なっていた」と推察されていた点も、橋がなかった時代の暮らしぶりに興味を抱かせる。例えば、橋ができたことによって、結婚などで嫁入りしやすくなったこともあったのでは

と考えられる。

初めて橋が架けられたとき、どのような思いが地域を包み込み、それぞれの生活に変化が現れたのだろうか。おそらく、橋の完成は川のそばに住む人には喜ばしいことだったのだろう。また、小さく循環していた暮らしが、少しずつ大きくなっていったんだろうと想像しながら、現存する舟場橋から、その地域の時代のあゆみをうかがえた。それだけで、なんともいえない満足感がある。

手が届かない、舟の記憶

明治20年に完成した舟場橋。そうすると、舟が往来していた歴史をたしかめるのは容易ではない。山本さんを通じて、橋の近所に住むご年配のかたがたにも聞いてみたが、舟の正確な記憶は手に入らなかった。唯一いただいた情報によれば、舟は未

使用時は滑車で吊り上げて収納されていたといわれている。使用するさいには、岸と岸をロープでつなぎ、それをつたって対岸に渡ったのではないだろうか。これも、想像でしかない。

もし、先祖代々記憶が受け継がれていれば、今でも舟の姿を思い起こせたのかもしれない。少し悔しさが込みあげてきた。

山、そして川もまた生活を築くうえでひとつの境目となる。その境目に「道」を拓いた橋は時代の産物である。日常と隣り合わせの構造物であるからこそ、川のそばや山奥に住む人にとっては、暮らしにおいて橋は意義深いものだったのだろう。橋も地域を観る材料となる。当たり前にあるものを、特別な眼差しを向けて考えを深めることのたのしみを舟場橋は教えてくれた。



八面神社の鳥居。よく見る鳥居の色は赤だが、こちらは白だ

鳥居の形

—八面神社の鳥居から—

9月の中旬、都留市夏狩へ富士山を見に行った帰り道。自転車をこぎながら、流れていく風景を見ているときだった。ふと視線を横に移すと、とある神社の鳥居が目についた。

細矢萌（国文学科1年）＝文・写真・図

鳥居……？

本学から西へ10分ほど自転車をこぐと、長慶寺というお寺につく。そのお寺を右側に見ながら、もうすこし進んだところ。左に曲がった路地の先に、それはあった。自転車を降りて、歩いて近づいてみる。「八面神社」という文字が額の中央にあった。目の前にある鳥居は、私たちがふだん見ている鳥居とは違い、一番上の部分が存在しない。これは果たして本当に鳥居なのだろうか。疑問が湧いた私は、ほかにどんな形の鳥居があるのかとても気になり、家に帰って鳥居のことを調べてみた。

鳥居のことを知る

鳥居とは、二本の柱の上に笠木、島木を置き、その下に貫というものを入れて柱を



額の文字。初めて見たときは、なんと読むのか分からなかった

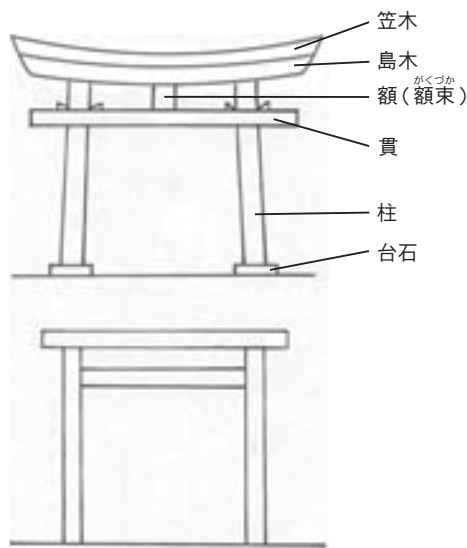
固定したものである。柱や笠木などの主要な部分に反りがあるかないかで、大きく二つに分類されるそう。反りがあるものが明神鳥居、ないものが神明鳥居といわれる。そのほかにもいろいろな形が存在するが、基本となるのはこの二つだという。

これを参考してみると、八面神社の鳥居は笠木と島木がないのだとわかった。一般的に鳥居の各部分は、地震や材料の劣化によって部分的に失われてしまうものもあるそうだが、この八面神社の場合、笠木と島木が乗っていたような痕跡は無い。それはなぜなのだろうか。考えが詰まってしまった私は、八面神社の宮司である小佐野景賀さん（50）にお願いし、お話を聞かせてもらうことにした。

小佐野さんのお話を聞いて

小佐野さんは、西桂町の浅間神社にご奉仕しており、八面神社などほかの神社の宮司も兼務している。

「八面神社の鳥居ですね。うちが代々ご奉仕させていただいています。とはいえ、八面神社については記録がないので、お答えで



基本的な鳥居である明神鳥居（上）と神明鳥居（下）。
額の後ろには額束という支えがある



八面神社の本殿。お祀りしているのは須佐之男命
すきのおのみこと



『南鶴神社誌』と『新編山梨県神社誌』。山梨県内の神社の情報が載せられている

きることは少ないです」

小佐野さんはそう言いながら、二冊の本を私に見せてくれた。『南鶴神社誌』という本と『新編山梨県神社誌』という本だった。

「この『南鶴神社誌』という本に、今のところ一番古い八面神社の写真が載っています」

小佐野さんが本を開いた。八面神社の古い写真が掲載されていた。奥付を見てみると、本の初版は昭和30（1955）年5月とあった。

「鳥居は聖域への入り口です。その形は、宮司とその神社の氏子（うじこ）（共通の氏神が守護する地域に住んでいる人たち）の考えにもよって形が決まるそうですが、はたして八面神社ができた当初から、この形だったかと聞かれると、詳しく調べてみないとわかりません」

真相はわからなかったけれども、小佐野さんのお話を聞いたうえで、一つの考えが

私のなかに浮かんた。これはあくまで推測だが、八面神社の鳥居は「門」をかたどっているのではないかと思う。「門」は境界への入り口だ。同じように鳥居も、もともと聖域への入り口を示すものだ。八面神社を建築した当時の宮司や氏子たちは、そのことを意識したのかもしれない。

取材でわかったことは、見方を変えらうことだった。鳥居についての疑問が湧かなければ、本や雑誌で調べることもなかったし、小佐野さんからお話を聞くということもなかっただろう。もちろん、鳥居についてすべてのことがわかったわけではない。八面神社の鳥居の成立についても、自分の考えでしかない。けれども、決まりきった見方をせずに、素直に疑問を持つということは大切だと感じた。今まで当たり前だと思つて、ただ見ていただけのものはどのくらいあるのだろう。そういうものに対しても、違った角度から見ようとしていきたい。

小佐野実著『南鶴神社誌』1955年5月15日
山梨県神道青年会編 創立60周年記念
『新編山梨県神社誌』2012年10月31日

鈴木商店を訪ねて



都留についてもっと知るため、昔からあるお店の人にお話を聞きたいと思った。そんなとき上谷にある「食べもの屋さん」の鈴木商店のことを耳にする。気になった私はお店に足を運ぶことにした。古くからあるお店は私にどんなことを教えてくれるのだろうか。

海賀沙也佳（比較文化学科1年）＝文・写真

気になるお店

10月26日夕方4時ごろ、本学から歩いて20分ほどのところにある鈴木商店へ向かう。道をまっすぐ歩いていくと、通りにひとつだけ明かりを灯す「鈴木商店」という看板が目に入る。入口の大きなガラス戸を開けて店内に足を踏み入れると、お菓子やカップ麺、調味料などがところ狭しと並んでいた。

品揃えの豊富さに感心していると、店の奥から小柄なおばあさんがいらつしやう。鈴木商店の店主、鈴木イマエさん（85）だ。初めての取材で緊張していた私にイマエさんは笑って「ここでは寒いから」と奥の部屋に案内してくれた。靴を脱いであがったさきには石油ストーブがついていて、テレビやテーブルなどが置いてある居間のような部屋だった。コーヒーとみかんを用意してくださいながらイマエさんは「冬は寒いからこの部屋でお客様が来るのを待っているの」とおっしゃった。商品を買ってくる常連さんのおしゃべりが毎日のたのし

みなのだという。お客さんが来たらすぐ気づけるようにと、部屋の扉を開けたままにしているようすからお客さんを大事にしている気持ちが感じられた。

イマエさんがお店を始めたきつかけは、お子さんの学費を稼ぐためだった。開店当初、お店は子どもが十円玉を持つてやつてくる駄菓子屋のようなものだったそう。そのあと、さまざまな年齢層のお客さんがお店に來はじめ、徐々に品数が増えて現在の食料品全般を売っているようになっていったという。なるほど、そうやつて鈴木商店は「食べもの屋さん」になったのか。

学生アパート

「うちには昔、学生さんが住んでいたのよ」
鈴木商店は、かつて店舗の二階を下宿として学生たちに貸していたのだという。部屋は四部屋あり、本学の学生がおもに利用していたそう。イマエさんは一階の商店を切り盛りしつつ、毎日学生たちにご飯を作ってお弁当を持たせてあげたのだという。

こんなふうに大家さんにお世話になって生活している学生は、今では珍しくなりつつあるのではないだろうか。イマエさんの温かい思いやりに支えられて暮らしていた当時の学生たちが羨ましくなった。

私は学生用のアパートは本学のすぐ近くに建てられているのが普通だと思っていた。けれど、鈴木商店のような本学から離れた場所に地域の人が経営する学生下宿があったのだ。本学が出来たばかりのころ、校舎の周りは、畑や田んぼばかりで何もなかったのだという。そこで、都留市内にある民家やお店が空き部屋を利用し、学生用の下宿を始めたということを知った。当時、鈴木商店の周りにも学生下宿が立ち並んでおり、街は活気に満ちていたのだそう。

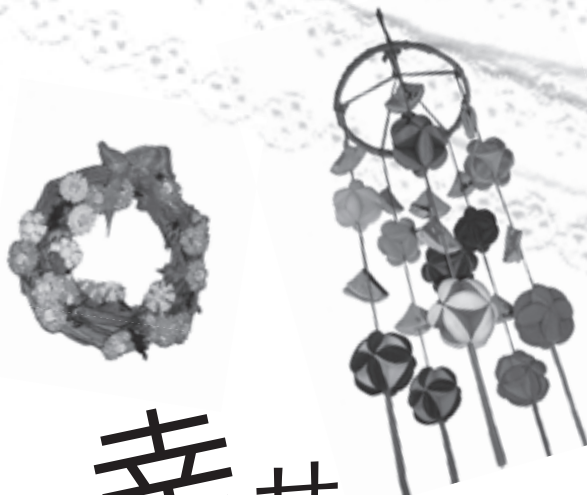
しかし時が経つにつれ、本学の近くにアパートが続々と造られるようになり、散らばっていた学生の生活拠点は本学周辺へと集まっていた。その結果、昔ながらの下宿が少なくなり、イマエさんも下宿経営を

やめてしまったそう。そして今の「食べもの屋さん」の鈴木商店が残った。学生のお客さんは減ってしまつてさびしいが、近所に住んでいる常連さんとおしゃべりをしたり、週に一度娘さん夫婦がイマエさんに会いにきてくれたりするのでそれなりに楽しい毎日だとおっしゃっていた。

かつては多くの学生が、イマエさんのような人に支えられて暮らしていた時代があった。お店からの帰り道、私は店の前のひと気のない通りを見ながら、立ち並ぶ学生アパートや、にぎわう街のようすを想像した。きつと今より地域のひとと学生の関係は密接なものだったのだろう。私のなかで都留の街を見る目が変わりはじめた。鈴木商店を訪れて、今住んでいる場所についてまた一つ知ることができた。そうして、都留という街に前より近づけた気がする。イマエさんの優しい人柄にふれ、もつと都留でのひととの繋がりがや昔にあったことを知っていきたいと思った。



米山さん（左端の女性）と来店していたご夫婦



幸せ の おすそわけ

—よねやま手芸店—



先月、家にあつた白い毛糸で手編みのマフラーを編んだ。ちよつといびつなマフラーは姪の希望でフリンジをつけてプレゼントした。マフラーの時期には少し早かったけど、私が編んだマフラーをつけた姪は嬉しそうだった。そんな姿を見て、私も嬉しくなった。胸があたたかくなった。小さな幸せを生んでくれた。都留にはどんな手芸屋さんがあるのだろう。

三枝弥生（国文学科1年） 文・写真

本学から歩くこと25分。都留市上谷にある

「よねやま手芸店」は、国道139号線沿いにある。お店の正面から見えるショールームはシャッターで閉められていた。お店の前の歩道は狭く、ほとんど人通りはない。閉められたシャッターと車の音しかない店先に、寂しげな印象を強く受けた。

店内に入ると、毛糸や布、針やボタンなどの小物、手芸本などの商品がところせましと置いてある。そこに紛れるようにつるし雛やビーズでつくられた花のリース（右上写真）などのたくさんの作品があつた。ひとたび目につくと、店内のどこをみても作品たちが輝きでも放っているかのように惹きつけられる。店先と店内とは雰囲気はガラリと違って驚いた。

お店と米山さん

店主の米山徳子さん（83）は、昭和38年にお店を開いて以来、お一人でよねやま手芸店を切り盛りしているそう。当時、米山さんのお宅から二軒下つたところに手芸屋さんがあり、その手芸屋さんに「店を閉めるんだが、代わりに米山さんがやってみないか」と言わ

れ、ご自宅の一階にお店を始めることになった。それが、現在のよねやま手芸店だそう。「始めるとき、そりゃあ、不安もあつたけど。好きなことだったし、二つ返事で引き受けたよ」。明るく話す米山さんは本当に手芸がお好きようだ。

「始めたころはビーズが流行っていたんだよ。今はパッチワークが流行っているからね、キルトとかもまた仕入れていくさ」。店内を見渡せば、まだたくさんのビーズが残っていた。「最近人は通らなくなつて、店に来るお客さんも少なくなつて寂しいもんだよ」。そう言つて、次々と閉めていくお店を挙げてくださった。「昔は、外から先生を呼んで、二階で手芸教室を開いたりしてね。生徒さんもいたんだがね。もう人はいないし、教室もやめて何年たつか」と語る米山さんの表情は、始めたころのことを話してるときとは打つて変わつて、懐かしさに寂しさを含んだものだった。

憩い

私がよねやま手芸店の入口に着いたとき、道の向かいからこちらへやつてくる一組の老

夫婦がいた。お店のお得意さんで、この日は、初めてのお孫さんの名前を米山さんに伝えるにやつてきたという。ご夫婦はたびたびこうしてお店を訪れては、米山さんと談笑するのだそう。

店内にあるたくさんの作品は、お店を訪れるお得意さんが作ったものだ。それらのなかには奥さんが作ったものもあるのだそう。ほかの手芸店でも作品を置いてあるのを見たことはあるが、それはサンプルだった。お客さんたちの作品だったのは初めてだ。米山さんとお客さん、同じ手芸という趣味をもつた者同士の友好の証なのかもしれない。思い出の作品たちに囲まれながら、いつも米山さんたちは話に花を咲かせているのだろう。楽しく話す米山さんたちを想像すると、なんだか私も楽しい気持ちになった。

「そうそう、いいものがあるのよ」。米山さんが奥の部屋からくまのぬいぐるみを持ってきてお店のカウンターに置いた。米山さんが「お店にひとつあると楽しいの」と言うとき、おもちゃのぬいぐるみだったのか、くぐもつた音でぬいぐるみが米山さんの声を復唱した。途端に店内は笑いに包まれる。老夫婦

も米山さんも、小さいころに戻ったかのように顔をくしゃくしゃにして笑つていた。米山さんが「こんにちは」と言うと、ぬいぐるみは「コンニチハ」と返す。それが繰り返されるたびにわきあがる笑い声に、胸の内側があたたかくなった。

よねやま手芸店には、米山さんがいて、お客さんがいて、ちよつとしたきつかけで笑い合える和やかな雰囲気があつた。それは、以前のような賑わいが少なくなった寂しさを覆うほどのものだった。米山さんの人柄。飾られているお得意さんたちの作品。米山さんの手芸が好きだという想い。これらが、店主とお客さんの関係を超えて、趣味を通じた友人という関係を築き、今のお店を空気をつくりだす一つとなっているのだろう。

お店をあとにした私はスキップをしたいくらい、いいものを見つけた気分になった。また来たいと思つた。お店を訪れるお客さんたちもきつとお店のあたたかさに触れ、気分良く買い物を終えて帰って行くのだろう。よねやま手芸店はそんな小さな幸せがあるお店だと思つた。

かみす 紙漉き

～「一枚」を
繊維から～

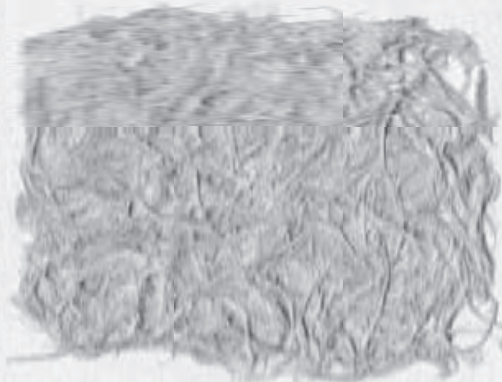
出かけた先などで、ひと目見て「おっ」と気に入ったハガキを、飾ったり、誰かへの手紙にしたりできたらいいなと思うようになった。しかし、そんなハガキとの出会いがなかなかない。今すぐ思い入れのあるハガキを手にしたい、という願望から、自分で漉いた紙でハガキを作ってみたくなった。図書館で見つけた本を頼りにしながら、手探りでやってみた。

平井のぞ実(英文学科4年) = 文・写真

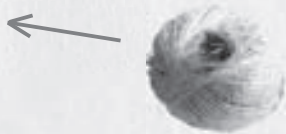
麻ひもで

まず、麻ひもで作ろうと思った。およそ1900年前、後漢(現在の中国)の人々が、紙を作るさいに麻を用いたと知ったことから、大昔の人々と同じ体験ができることに大きなロマンを感じ、じつさいにやってみることにした。なんとか本の手順に従って作業していたのだが、3時間ほど煮込む工程で、強烈な匂いに意表をつかれた。呼吸器官にツンとくるような匂いに包まれつつ、乾燥のみを残す段階に辿りついた。翌日は朝から快晴。さんさんと光と熱を注ぐ太陽は心強く、とてもありがたかった。

日光の恩恵を受けて、しっかりと乾いていた完成品は分厚く、非常に目が粗い。紙ではなく布のようだ。書いたり、折り目をつけたりしづらく、紙としての完成度は低い。乾かす前はバラバラだった繊維が乾燥してしつかり絡み合ったまま固定され、面を成していることが驚きであった。



できあがったもの。紙らしさがあまりない



紙ができるまで

①



原料を約3cmに刻む。ハガキ一枚には、両手いっぱいくらいが目安。荷造りに用いる麻ひもを、紙の原料として扱っていることが不思議だ

②



①に、重曹を加えて鍋で煮込む(重曹は繊維を柔らかくする働きがある、と参考図書に記述があったので使用した)。3～4時間かけて、繊維を柔らかくする

③



②をカナヅチでたたく。たたけばたたくほど、繊維がほぐれてくるのがよく分かって、やりがいを感じられた

④



③を水に混ぜて、網に流し込んで形を整えてから、日当たりの良い場所で乾かす。晴れていないとできない工程なので、天気予報の確認が必須



採集した4種の野草を刻んだもの。
藁に見立て、茎の部分を用いた



たたいたあとの原料。
(上) よくたたいたので、繊維を細かくほぐすことができた。(下) 水に溶かすと、麻ひものときよりとろみがあった



野草で漉いたもの。麻ひものものよりも薄く、粗い
藁半紙のよう



使用した野草。(左から)
エノコログサ、カゼクサ、
ススキ、チカラシバ

野草で

麻ひもで作った紙の作りに感動して、「こんなものでもできるのか」と思えるもので試したくなり、野草でやってみることにした。イネ科の植物が適している、という参考図書の記述や、植物に詳しいとお聞きしていた、本学初等教育学科非常勤講師の上野健^{うえの たけし}先生のアドバイスをもとに、市内の川棚地区のあぜ道でエノコログサ、ススキ、チカラシバ、カゼクサを採集した。10月28日と11月11日の2度採集したのだが、2度目におこなったときは、野草が枯れかかっていた。黄みがかつた野草は、見た目も手触りも藁^{わら}に似ていて、本誌64号(18・19頁参照)にある藁を使った紙漉きの記事を思い出し、あんなふうに麻ひもより整ったものができるかも、と少し希望

が湧いた。工程は麻ひものときと同様だが、煮込む時間を約2倍にするなど、繊維が細かく、柔らかくなるように、手順をとるところどころ工夫してみた。

印象的だったのは麻ひものときと匂いが違っていたことだった。米が炊きあがる直前のような、風味豊かな匂い。イネ科の植物であることと関係があるのだろうか。

完成品は、麻ひものものよりも、ぐつと紙らしくなった。煮込む時間を増やしたことで、たくさんたたいたこと、原料が異なること。要因はいろいろ考えられるけれど、自分なりの工夫の成果が目に見える表れたのが嬉しかった。

紙作り、手作り

最終的には、原料を生かした自然の風合いを目や手で味わえるハガキを手に取りたいと思っていたけど、できあがったのは、見た目も手触りも、紙らしさに欠けるものになった。しかし、完成品は作りが粗いぶん、絡み合った繊維によつてできているという、紙特有の構造をじっくりと理解できるものになった。手にすると、日常に溢れる、紙というあまり意識しなかったものに焦点を当てる貴重な機会を得たのだな、としみじみ思う。

また、手作りという言葉に感じていた、ぼわつとしたあたたかみのようなものの正体に向き合うことができた。それは、時間と手間をかける情熱や、誰かに向けたまごころ、といった熱い思いや温かい気持ちから生まれているのかもしれないと感じた。その道のプロでなくても、「作りたい」「誰かに届けたい」といった思い一つで始められることは、手作りする側にとつて、また手作りを受ける側にとつても、魅力になつていくように思う。きつとこれからも、できあがった不格好な紙は、そんな手作りの魅力を感じて出させてくれるだろう。



山梨の味 ～ワイン編～



ぶどう
葡萄の一大産地、山梨県出身の私にとってワインは身近なもので、スーパーに行くと一升瓶のワインが置いてあったり、実家では何かのお礼にワインをあげたり貰ったりと、暮らしの隅にいつもちょこんといるような存在だった。

今年 20 歳になった私の前に、味わうものとしてはっきりと姿を現したワイン。するといろいろな疑問が芽生えてきた。どうやってできるのか、誰がどんな思いで造っているのだろうか？

ワインのことをあまりよく知らない今だからこそ、新鮮な驚きがあるかもしれない。

深澤加奈（国文学科 2 年）＝文
崎田史浩（社会学科 4 年）＝写真

見渡すと、一面の葡萄畑。都留よりも遠くに見える山並み。10月27日、私は甲州市勝沼町にある、丸藤葡萄酒工業を訪ねた。

売店のかたに声をかけると、取材をお願いしていた竹内毅徳さん（40）は上の階にいるとのこと。竹内さんは山梨大学で放線菌（土のなかに存在し、抗生物質を生産する菌）について学び、ワイン造りの道に進んだからだ。私は人づてにそのことを知り、ぜひ竹内さんにお話を伺いたいと思った。階段を上った先には銀色の大きなタンクや見たことのない機械が並んでいて、4、5人のかたがしがみこんだりホースを持ったりしながら、なにやら作業をしている。邪魔にならないか、と隅のほうでたじたとしていると奥から作業着姿の竹内さんがやってきた。

木製樽の秘密

取材ということでも少し緊張されているようすの竹内さん。ゴーゴーと音を立てている葡萄プレス機の前まで移動し「今日はちょうど仕込みをやつてよかった。例年だと仕込みは9月の半ばから10月の半ばにかけてなんです」と言つて作業場のほうを振り返る。今年



作業場で葡萄をプレスする機械について説明してくださる竹内さん（左）。作業場は屋外になっているため、光に照らされて明るい

は雨量が少なく、病気にかかる葡萄が減つたため、質の良い甲州種葡萄が多く収穫されたそう。そのため仕込みの量も増え、例年ならすでに終わっているはずの作業工程を見せただけができた。

地下貯蔵庫を案内していただく途中、木製の樽が並べられている場所にきた。展示の一部なのかと思い「このなかは空なんですか？」と竹内さんに尋ねると「ワインが入ってるよ。こつちに来てもらうと分かるんだけど」と言いながら樽に近づき、その側面を指差す。私も近づいて竹内さんの指差す先を見ると、外国語で何か書かれている。「ミディアムって書いてあるんだけど、樽の焼き具合のことなんだよね」と言われ、少し戸惑った。そのよ

左：木製樽。側面には焼き具合と、材料となるホワイトオーク（ナラ類）が生えていた森の名前が刻印されている。数字は樽番号

右：タンク内に貯蔵されているワイン。発酵して、表面には泡が立っている



うすに気づいた竹内さんは「焼くとスモークの風味が付くんです。うちは大体ミディアムかミディアムプラスだけど、ライトとかヘビーとかの焼き具合もあるね」と付け加えた。容器としてしか樽を見ていなかった私にとって、それは思ってもみないことだった。

国内ではほとんど樽が生産されていないため、丸藤葡萄酒工業で使っているものの多くはフランス製で、焼き具合とともに木の産地である森の名前が記されている。樽に入れることで味わいもふくよかになり、香りも香ばしくなるそうだ。ワイン樽に使うのはホワイトオーク（ナラ類）だけで、ほかの木だと風味があまり良くならないそう。同じホワイトオークから出来た樽でも、どの森に育った木なのかで少しずつワインの味は変わる。一つの森とワインのあいだにも小さな繋がりがあったのだ。

ワインのこれからを考えて

「ワインって、いくら『おいしいですよ』って言っても試飲しないと分からないから」と竹内さんが持ってきたボトルは『甲州シュール・リー（白）』。試飲させてもらおうと、ワイ

ン特有の酸味と渋みはあるのに、初心者の方が飲んでも口当たりが優しいと感じた。このワインは勝沼町産甲州種葡萄を100%使用している。皮が厚く、控えめな甘さが特徴の葡萄だ。

感想を伝えると「みんな、国産のレベルが上がってきていることを知らないんだよね。外国のワインも美味しいけど、ちよつとお金を出して日本のワインを買ってもらえれば」と竹内さん。国産のワインは人件費の面でどうしても高めの値段になってしまう。

今年は9人で一カ月半仕込みをし、計190tの葡萄を使ったそうだ。扇状地で水はけがよく、降水量も比較的に少ない山梨県では、江戸時代から葡萄栽培がさかんになった。今年は豊作だった甲州種葡萄だが、近年その収穫量が減り、値段も上がってきている。葡萄の取り合いに近いことも起こっているという。お年寄りのなかには、後継者となりうる家族がいても「農家は苦勞するから」とやせせたがらない人も多いそうだ。

「葡萄作りも、おじいちゃん、おばあちゃんが死んじゃうと畑が草や虫だらけになって。葡萄も病気になるって。若手って言われてる人です

ら50代だしね」と竹内さん。もともと自社畑を所有している丸藤葡萄酒工業だが、手入れがされずに荒れてしまった葡萄畑にも、2年前から苗木を植える取り組みを始めた。

「ワイン造りは結局葡萄作り、農業」と竹内さん。手放された畑には建物が出来ていくそうだ。「なんであそこ？」つてところにどんな家が建っていった……と少し言葉が途切れる。だが、一息置いたあとに「畑を潰さないで、今あるところに葡萄を作って、山梨のワイン造りの一端を担えればと思ってます」と答えた竹内さんの表情には、生きいきしたものがあつた。

森とワインには思いがけない関わりがあつたこと。農家のかたからワイナリーへと葡萄が手渡され、そうして私たちの手元にワインとなつて届くということ。自然と人、人々との関わりのなかから一本のワインはできている。取材を通してそのことに気づくと、ワインを飲んでいる人たちに「こんな積み重ねの上にその一杯は出来ているんだよ」と竹内さんたちの想いを伝えたくなつた。話したくなつた。それを知って飲むワインは、もつと味わい深いものになると思うのだ。

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。



映画館の壁にて。益子亮氏撮影・益子邦子氏（都留市上谷在住）提供

たに ふみ
谷の町・史の里

谷村にあった映画館のこと ②

「ヒロバ」での遊び

— その後の「谷映」(1) —

— 谷村にあった映画館のこと①『ヤエイ』と私』—（*1）では、益子邦子さんの記憶を綴っていただいたが、今回は、「谷映跡地」に建つ高尾町通りのイタリアレストラン「BONZO」店主、岩間美千子さんに記憶を記していただいた。



ぼ

ろぼろになった私のアルバムのなか
に「谷映の……で」とメモ書きされ

た写真が数枚ある。母に抱かれた私、「谷映の外壁」を背にしている。撮影は昭和28年2月。「谷映座入口で泥いじりをして叱られて泣いている」という注釈付きの写真は昭和30年8月。すでに映画館としての営業を終え、貸店舗としてパチンコ屋が入居していたが、わが家ではこの建物を変わず「谷映」と呼んでいたようだ。これらの写真はメモ書きがなければ場所は特定できないし、映画館が想像できる写真ではない。「谷映跡地」（*2）に花を咲かせたヒマワリの前に立つ私。撮影は昭和34年ころの夏。データなどの記述はな

いが、後ろに写る家に覚えがあり、場所を特定できる。

この「谷映跡地」を私たち子どもは、「ヒロバ」と呼んでいた。ここは恰好の遊び場となっていて、近所の多くの子ども（*3）が集まっていた。縄跳び、チンチンパタ、缶けり、缶に紐を通して足を乗せて歩くカンポツクリ、ベゴマやメンコ、キップ売り場の名残であるアーチ形の鉄パイプを利用して、逆上がりなどの鉄棒遊びなどをしていた。

なかでも最もスリリングなのが「ヒロバ」の地形を利用した遊びであった。「ヒロバ」は建物を移しただけで、跡地は整地されていなかった。舞台があつた場所に向かって、緩い下りの傾斜が付いていて、舞台の基礎となる部分には土が1mほどの高さに積み固められていた。リヤカーを持ち出し、引き手を除く子どもたちは荷台に乗り、引き手はこの傾斜を土手に向かって突っ込んでいく。土手にぶつかるのは前面の横パイプ、左右の縦のパイプを握っている限り手を痛めることはない。衝撃を楽しんでいた。「ヒロバ」ならで

はの遊びだった。この傾斜に台風の大雨で大きな水溜まりができたときには、筏^{いかだ}を作り、浮かべて遊んでいたという。なかなか引かない水に虫が湧き、体中を蚊に刺されたと聞いている。多少血が流れ出ようと、「ペニシリンド！」と、唾を吹きかけそのまま遊びに興じる。そんな時代の子どもたちの楽しい遊び場が「谷映跡地」であった。

余談ではあるが、本誌74号で益子邦子氏と言う「野良犬チヨロ」は、

前頁の益子氏の写真に写る白い犬で「谷映の飼い犬」であった。飼い主がいなくなった「チヨロ」は夜になると、横町駅（現都留市駅）前に佇んでいて「まるでハチ公のようだ、可哀想に」と多くの人が言っていたそう。実際は、引越しのトラックに乗せたが飛び降りて

しまい、どこかに隠れてしまったという。彼女は、魚国^{うおくに}（*4）の飼い犬と恋仲になっており（写真に写るもう一匹の犬がこれか？）、「いつもまるで夫婦のように寄り添って浮世横町（*5）あたりを歩いていた。この地を離れたくなかったのだろう」とは谷映の長女談。多くの人に可愛がられたおとなしい犬だった。私の写真にも登場しているが、4歳くらいの写真から姿が消えている。



「ヤエイ」の外壁を背に撮影された母との写真（昭和28年2月3日撮影）

【注】

- *1 谷村にあった映画館については本誌74号35頁を参照のこと。
- *2 昭和30年、「谷映」は神奈川県小田急相模原に移築された（谷映経営者の長女（昭和14年生まれ）からの聞き取りによる）。
- *3 昭和22年頃〜31年生まれ。
- *4 当時の谷村でもっとも大きかった料亭。現在の都留市中央2-3-18にあった。
- *5 谷映から魚国方面に通じる路地で、当時こう呼ばれていた。



「ヤエイ」跡地に咲いたヒマワリの前で（昭和34年ころ撮影）

起き上がる朝

—暮らしのなかの詩—

だ

からまあ、(詩画展が始まる以前から)とにかく詩をね、詩誌の『樹』で配つ

てるでしょ、みなさん。だけどそれぞれが交流がなくて、自分で読んでるわけよね。それで時々会ったりすると「あの詩はよかった」とかね、「こうだった」とつていうのね、そういう感想が入ってくるのね。もう相当前だけど、朗読会を20回もしてる。YLO(都留市文化会館)の4階のステージで、照明全部使つて、赤いのやいろいろ、そしてバックにもスライドで、いろいろなもの映すのね。私たちも朗読するけれど、読んでくださる人にも、自分が今まで読んでね、良かった詩をね、朗読してもらうの。で、朗読20回もしている間に、ちよつとやつぱり長くとマンネリ化するから、「じゃあ詩画展をやってみよう」つて言つて、始めようとしたけど大変だったの。



10月19日から21日、詩友会による第24回詩画展が開かれました。遠藤静江さん(80)は、自らが詩を書きながら、詩友会の会長などの詩を広げる活動を精力的におこなっています。今回は詩画展が始まったきっかけ、詩という表現の根源など、遠藤さんが詩に込める思いを紹介します。

始めみんながねすごい、会員が怒つてね、「詩だけ書くなんて、私たちもう大変なのにね、絵も描いたり字も書いたりなんちゅうことはね、できないよ」つて言つたの。「もつとね、字が上手になつたり絵が上手になつたらね、やれるかもしれない」つて言つたの。だから私がね、「字が上手になつて絵が上手になるまでつて言つてるとね、死んじゃうよ」つて言つたの。そうじゃなくて、人間つてね、今できることを精一杯やればいいじゃないのつて。それがもし違つてたらば、自分でね、変えて進歩していくのね、一歩ずつ進んでいく、それでいいじゃないのつて。

でもあんまりみんな納得しないよね。絵なんていうのは、絵を描く人ならともかく、そうでない人はふだん絵なんて描かないもんねえ。だから、じゃあ絵じゃなくても写真でも

いいし、詩に対して何かを工夫してつたつて。そしたら押し花だつていいしね、折り紙で折つたものでもいいしね、つて言つて仕上げたら、すごいバラエティに富んだのよ。

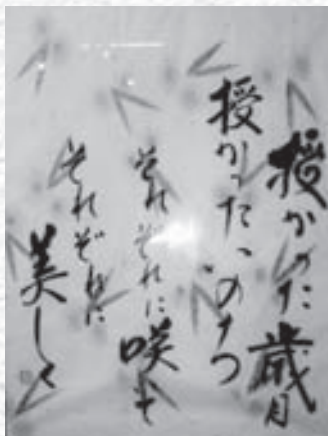
作品を作ることの難しさ

だから、一つの作品を生み出すつていうことはね大変なことね。体育で言えば助走の段階が長い。何にもしないようだけでも、ずつと考えたり、ふらふらふらふらして、それでやつとジャンプするのね。同じなのよね。だから人間の誕生もそうだよ。お母さんが10カ月さ、やつぱりその間はいろいろの悩みもあるし苦労もあるし。そして生まれたじゃないのよ、生むのよ。自分で生み出すの。他力本願じゃなくてね。だから、なんか一つするとね、それがねみんな共通なのよね。スポー

ツでも何でも一つのことをするっていうのはね。と、思いますね。

学校での詩の取り組み

詩っていうじゃなくて、生活なの。生活が詩なのよ。どういうことかって言うと、子どもっていうのはさ、よくお花持つてこない？学校へ。お母さんがね、「これ持つて行きな



写真右：詩画展によせて遠藤さんが書き起こした『序』
左：詩友会の皆さん



さい」って言ったからって。そうすると例えば、ネコやナギがね、春になると出てきたりするでしょ。で、こう花瓶にね、花係が挿してくれたりするの。そうするとね、「うわあ」なんて言つてさ、私が私の言葉で言うの。あれ、赤ちゃんのほつぺみたいだねえ、つるつるしてとかね。そうすると子どももね、共感するよね、「はあー」って。

そういうことをね、毎日気づかせてくの。外へ出てね、「ああ、風が吹いてきたあ」なんて言つてね、「わあ春が先生のポケットへ入っちゃった」とかね。そして今言つたのを言葉に置き換えるの。そして文字に書くの。その繰り返し。だから詩を書きなさいって書くんじゃないの。詩の時間じゃない、朝のホームルームとか、ちよつとところで、やつてくのね。

1人の男の子がね、教室のすぐ横が花壇になってたの、で水仙が咲いてるの、「先生ね、水仙が僕のほう全然見してくれない」って言うの。「ああそう、じゃあ会いに行ったら」って言ったのよ。したらね、下履きになつて行って、水仙とこう向かい合つてね、「先生ね、水仙がね僕のほう向いたよ」って言う

の。でね、「僕ね、ラッパみたいだったからね、内緒であれをね、吹いてみたかった」って。「アッ」てね。「良いことに気が付いたじゃん、それ今書いてごらん」って。その言つた通りのことを書くわけ、その子が。そうすると今度はだんだん私がね「あ、これ詩だよ」って言つて、そこでこれが詩だつていうことを気づかせる。と、クラスの子どもたちが、だんだん、「あ、これ詩になるね」「これ詩になるね」とか、私がおかすると「先生それ詩になるでしょ」っていうふうになりながら、詩になつてくわけ。詩を作つてくわけ。

だから生活のなかからすくいあげるつてそういうことなのね。暮らしのなかで。本当ね、子どもが感じてくれるつていうこと。感性だよ。感性を育ててくのね。



遠藤静江さん
(えんどうしずえ)

1932年11月23日生まれ。1989年まで小学校の教師を勤め、現在は詩・和服リフォーム・油絵など、地域を巻き込みながら幅広い活動をおこなっている。自身の行動力の源については、起きる時刻・寝る時刻・食べる時刻というように、リズムが定まった生活習慣と、人に言われて何かをするのではなくつねに自分のやりたいことに従って行動する姿勢だと語る



10周年企画 第3回



『フィールド・ノート』をつくるということ

～OB・OGとの座談会～

2012年春、『フィールド・ノート』は創刊10周年を迎えました。10年の歩みのなかで私たちが大切にしてきたこととはなにか。そしてこの先、大切にしていきたいこととは。

第3回は、編集部を支えてきた先輩方の目線からみた『フィールド・ノート』についてお話をうかがいました。

前澤志依（国文学科3年）＝文
深澤加奈（国文学科2年）＝写真

——編集部に入ってから変わったこと、与えられた影響について教えてください。

今井さん（以下、今井）…ぼくは昔から編集とか文章を書く仕事に就きたいと思っていたので、それをじつさいにやってみることができたのが『フィールド・ノート』だったんですね。こうやって雑誌を出すっていうことは、べつになんの就職とかにも役立たないか

これまでの10周年企画では、本誌の根底にある思想、冊子が完成するまでの流れや変遷を見してきました。では、編集部を支えてきた先輩方はなにを思いながら活動をしてきたのでしょうか。10周年を機に先輩方から直接お話をうかがいたいと思い、10月28日、東京都新宿区の喫茶店で、今井尚さん（34、前田恵子さん（28）、杉山由貴乃さん（25）にお会いしました。今回は、座談会をした内容の一部をご紹介します。

もしれない。でも、やつぱり、編集の一連の流れがわかるじゃないですか。それをじつさいにやってみることは、じつは一番実践的に役に立つんじゃないかなって思いますよね。

ぼくはこの『フィールド・ノート』をやった後どうしようかなと思って、ちよつとカナダのほうに行つたんです。でも結局、日本に帰つてきて雑誌社に入つたんですけど、やつぱり雑誌なんですよ。同じことをずっと続けている。そのあと自分でも雑誌をつくらうと思うて『旅と冒険』という雑誌をつくつてみたんですね。それはまさに『フィールド・ノート』でやってたことと一緒に。だから、文章を書いて、編集して、出すっていう一連の流れを最初に実践したのが『フィールド・ノート』なんで、ぼくはすごく影響を受けたし、ここからスタートできたっていう感じがあつて、今でも大切な経験だったなつてすごく思うんです。そういう意味ではすごく大きなもので大切ですね。

——じつさい、活動をして良かったですか？

今井…それはもう、もちろん。立ち上げられたつてのはすごく良かったんです。試行錯誤しながらつくつていったんで。10年経つた今でも、西（教生）くんが定期的に、野外で見た生きものの記録と感想をまとめてPDF化したものをメールで送つてきてくれるし、そうやって活動が続けるっていうのは大切ななと思うんですね。『フィールド・ノート』を立ち上げて、それが今もずっと10年間続いているっていうのはすごく嬉しいし、たぶんなんかまた新しいことをやってみようって思ったときにも、なんかなるんじゃないかって思える、そういう経験にはなつたかもしれない。たとえば、将来ぼくが、仕事のなかや仕事以外で、なんか新しいことをやろうって思ったときにも『フィールド・ノート』を立ち上げることができたから、また同じような感じで手探りでいいじゃん、今はもう『フィールド・ノート』をつくる一

先輩方の プロフィール

編集部に入った年・ご職業・
好きな食べものなどをお聞
きしました



今井尚さん

(いまい・しょう) 1978年、愛知県生まれ。本
学比較文化学科を経て、2002年度大学院修了。
『フィールド・ノート』00号からの編集部員。現
在は朝日小学生新聞の記者として活躍をされてい
る。好きな食べものは、吉田のうどん・「ビスウィー
ト」のペスカトーレ・「パンカムツル」のドリア・「く
ろき」の定食各種（上記3つは都留にあるお店の料理）。



前田恵子さん

(まえだ・けいこ) 1984年、熊本
県生まれ。2007年度に本学初等教
育学科を卒業。2004年の春に編集
部に入る。編集長を務めたことも
ある。現在は人材教育のお仕事で
活躍をされている。好きな食べも
のは、ばんべいゆ（地元の柑橘類）。



杉山由貴乃さん

(すぎやま・ゆきの) 1987年、静
岡県生まれ。2009年度に本学国文
学科を卒業。2007年の春に編集
部に入る。55～62号まで編集長を
務める。現在は編集プロダクショ
ンで活躍をされている。好きな食
べものは、果物・ゼリー。

連の流れがシステマチックになったけ
ど、揺れてぶれまくる感じでも、なん
となくやっていけばなんとかなるとい
う気持ちになると思うんです。なにか
をやるにしても、経験を積んでいかな
いとできないし、システムつていうの
もできあがらないと思うんです。そうい
う意味では最初のスタートを切る経験
ができてよかったなと思います。

前田さん（以下、前田）：わたしは『フィー
ルド・ノート』をやったことでいろん
な人に会えたので、人に採まれました
ね。自分が高校までに会える人って、
たぶん本当に小っちゃい限られたなか
の、しかもけっこう価値観に近い人ば
かりだと思うんです。それは大学もお
なじで、自分があるていどある場所に、
そういういろんな人に出会える場所に
行かないと気の合う人間としか付き合
わない場になりかねないと思うんです
ね。でも『フィールド・ノート』は市
民の人にも会えるし、一つのものにつく
る。そのなかで締め切りが近くなると、

どうしても意見が合わない人とはぶつ
かることもある。でも、そういうのを
繰り返したなかでできあがるとその人
の個性は個性でおもしろくて。

『フィールド・ノート』を自分たち
がつくっていくと、今井さんたちがつ
くり上げてきた、立ち上げメンバーの
すごさがすぐわかるし、今届いてい
るのを見ると、今のみんなががんばっ
ているのを感じることができる。その
一連の個性のなかに自分を置かせて
もらったことがすごくありがたく思っ
て、いろんな人に出会うきっかけをく
れたし、いろんな人に出会うことの
おもしろさを教えてくれたのが『フィー
ルド・ノート』だったから、そういう
意味で良かったかなと思います。

杉山さん（以下、杉山）：自分のものの
見方に影響を与えてくれた存在だなど
思っています。「つるたん」（こちら
つる探偵局）55～63号まで6回にわたり連載。
都留でみつけた謎スポットを、聞き取りをも
とに解明していく内容）がいい例ですね。

わたし、都留に初めてきたとき「何もないところだ」って思ったんです。スーパ―、山、大学……えーっ、それだけ!? って。でも、「つるたん」では、都留のまちを歩いていて見つけた「ちよつと変なもの」について地域のかたに話を聞いて、ていねいに調べてみたら、どれも3000字ぎっちり埋まるくらいすごい秘密があつて。何もないと思つても、歩み寄つてきちんと見てみれば、なんでもあるんだなと。そういう見方というか、ものごとに対する姿勢を身につけられたのはすごく大きかつたなと思つています。

あと、編集部では編集のことだけでなく、本当にたくさんさんの経験をしたので、自分のなかの基準……基準についていいのかな、基準になつてい部分があつて。たとえば、スーパ―で梅が並んでいるのを見たら、都留でも梅仕事をしたとか、梅の甘漬けづくりは塩揉みの作業が一番大事なんだよな、とか。そういうふうに、折に触れて都留での経験を思い出すんですよ。



ね。自然に結びつくというか。
前田…たしかにそれはあるかも。絶対に編集部にいなければカラスを見て感動することもなかっただろうし。
杉山…羽が落ちていたのを見たら、高瀬さん（編集部OG）が拾つてたな、この羽はどの部分の羽かなと思つたり。都留での経験が本当に濃かつたんですよね。「基準」というか、「原点」と表

現するほうが合つてるかも。
前田…『フィールド・ノート』をつくつたおかげで、ちよつとのことでは動揺しなくなりましたね。
杉山…そうですね！ 生きる力のようなものを鍛えられた気がします。味噌もつくつたし。
前田…薪割りもしたし。
杉山…どんと構えていられる部分はありますね。

今井…ぼくは1年生、2年生のうちにもつとこうしていつたらいいのになとか、こういう雑誌にしていつたらいいのになと思つたら、変えていつていいと思ふんですよ。『フィールド・ノート』のバックナンバーをずらつと並べると、どんどん形が変わつているのがわかるように、たぶん今の最新号が最終形じゃないかと思うから、どんどん新しくしていつていいんじゃないかなつて思ふんですよ。

インタビューを終えて

今回、大先輩にお会いするということがとても緊張しました。しかしお話をしていくうちに、私が入る以前の編集部のようななどを知ることができ、緊張よりもつとお話を聞きたいという気持ちでいっぱいになりました。

先輩方は都留を舞台にいろいろなことに挑戦していました。そして、その経験が自分の生きかたのなかで、かけがえないものとして心のなかに残っているようでした。スタートを切る経験や人に揉まれたこと、ものの見方が変わったこと。積み重ねてきた経験のなかで先輩方が感じたことを私も活動を通して感じるものが多くあります。

『フィールド・ノート』をつくることは雑誌をただつくるだけでなく、自分の生きかたの土台をつくることにも通じていると思います。編集部での経験が将来にわたつて私のなかで生きていくだろうと、先輩方の姿をみて強く感じました。

FIELD・NOTE NEWS

2012.09~11

本学フィールド・ミュージアム＝写真
石山惇大（社会学科1年）＝文

メダカと触れ合う

10月24日、本学附属図書館横のビオトープで谷村第一小学校2年生の授業が開かれました。テーマはメダカです。授業の手伝いをした平井のぞ実さんは「クイズを出したり、オスとメスの違いを分かりやすく説明したりと、小学生がメダカに興味を持ってくれるように工夫しました。みんなとても喜んで参加してくれていたの、私も楽しく取り組みました」と、授業への手ごたえを感じたようでした。2年生は現在、本学ビオトープのメダカを飼育しています。



活発に手をあげる小学生たち



木々の葉が落ちはじめてきた

ビオトープの樹木調査

10月30日と11月6日に、本学附属図書館横のビオトープの樹木調査をしました。この調査に参加した香西恵さん^{こうざいけい}は「ビオトープにはどんな樹木があるか、高さや大きさはどのくらいなのかを記録していきました。調査をしたのは今回が初めてで、2回で大小合わせて134本の樹木を観察することができました。ふだんは大きな木しか目につきませんが、よく観察すると小さな木もたくさんあることを知りました」と、語ってくれました。

富士路を歩く会

11月10日、都留市郷土研究会のみなさんと学生有志が参加して第5回「富士路を歩く会」がおこなわれました。今回は赤坂駅を出発し、^{かちゅうがわ}家中川に沿って「富士路」を歩きます。周辺にある^{いち}市神社、^{おいで}生出神社、^{ほじゅいん}保寿院、^{せいせん}清泉寺、東陽院と5つの寺社をめぐり、その土地の歴史や民俗にまつわるお話をうかがいました。私は今回初めて参加し、都留市には多くの寺社があることに気づき、自分の住んでいる都留市についてさらに深く知りたいと思うようになりました。



生出神社にて。木々に囲まれひんやりとした空気を感じた

NEWS

◇駅の展示替え

9月7日、富士急行線 都留文科大学前駅の待合室の展示を新しくしました。「秋」をテーマに、カラフルな花や実の展示などに衣替えしました。駅へお立ちよりのさいには、ぜひご覧ください。

◇クルミ拾い

9月26日、十日市場にある熊太郎稲荷にてリスやアカネズミの食べものとなるクルミを拾いました。

◇第4回「富士路を歩く会」

9月29日の第4回「富士路を歩く会」では、禾生駅から禾生地区一帯を歩きました。

FIELD NOTE

no. 75 Dec.

発行人

北垣憲仁 [38-39]

統括編集者

西教生 [21]

編集長

香西恵 [22-23,46-47]

牛丸景太 [18-19]

前澤志依 [4-5,42-44]

副編集長

深澤加奈 [36-37]

編集

大澤かおり [6-7,14-15,40-41]

小佐野めぐみ [2-3]

崎田史浩 [26-27]

平井のぞ実 [34-35]

藤森美紀 [10-11]

持田睦乃 [1,48]

鈴木陽花 [16-17]

梶澤碧 [24-25]

石山惇大 [45]

海賀沙也佳 [30-31]

三枝弥生 [32-33]

別符沙都樹 [8-9]

細矢芽 [12-13,20]

細矢萌 [28-29]

ロゴデザイン

工藤真純

10周年ロゴデザイン

石川あすか

() は編集担当ページ

FIELD・NOTE (フィールド・ノート) 75 号

発行日: 2012 年 12 月 28 日

発行部数: 400 部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

編集 後記



十月に入ってから何度か都留市の外に出る機会があり、戻ってくるたびに肌をさす風がだんだんと冷たくなっていくのを感じた。そのたびに厚い布団を引っ張り出さなくては、コタツを出すべきだろうかなどと考えをめぐらす。結局使わなかった扇風機を実家から運んできたのはついこのあいだのようなのに、季節は着々と移り変わっているようだ。時の経過のはやさが惜しいような、新しい季節の到来が嬉しいような気持ちで、冬を迎える準備を進める。
(別符沙都樹)

周りに溢れる人、また人。10周年企画の取材に同行し、東京の人ごみのなかをはじめて自分の足で歩きました。帰ってくると改めて都留に流れる時間の穏やかさに気付かされます。気さくに話しかけてくれるおじさん、おばさん。紅葉していく木々が窓から見える教室。時たま授業で 都心から通ってくる先生に「都留の学生はもっと都会を知らなきゃだめだ」と言われます。たしかにそれは私たちが社会人になっていくうえで必要な経験です。でも畑と山と川とに囲まれたこの静かなまちで大学生活を送ることができて、私はやっぱりここに来てよかったなと感じるのです。
(深澤加奈)

年末、「今年は良いことなかったなあ。よし、来年こそは」と意気込んで新年を迎える。毎年のことである。絶対に良いことはあったはずなのに、思い浮かぶのは思い出すには苦いことばかりだ。昔を振り返ると、どうしても嫌なことばかりが出てきてしまう。だが、今年は、良いことも思い出そう。「来年こそは」よりも「来年も良いことがあるはず」と思う方が、新年がより良い年になると思うのだ。
(三枝弥生)

次回予告



ーつぐー

